

浄土

十一月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特例郵便物認可第三五二号)
昭和三十六年十月二十五日 印刷 昭和三十六年十一月一日発行

第二十七卷

第十号

修養しめくり

◇日日の修養に無言の布教◇



(内容見本)

定価 一〇〇円 送料 三〇円

体裁 タテ 43 cm × ヨコ 14 cm 上質紙使用

美麗 二色刷 三二枚綴

割引 一〇部以上一割引 五〇部以上二割引

(一〇部以上一〇部増ごとに 都内五〇円その他一〇〇円)

予約者特別割引

11月末日までの申込者に限り部数を問わす。

上記割引率プラス5分引と致します。

(例 1部 95円 送料 30円・10部 850円送料 都内 50円) 送料 100円)

申込先 東京都千代田区
飯田町2の8

法然上人鑽仰会

振替東京 82187
電話 (332) 5944

浄土

十一月号

およそ五種の嘉誉をつたへ、二尊の影護をかうむる。これはこれ現益なり。また浄土に往生して、乃至成仏す。これは是当益なり。

法然上人御法語



中央アジア出土の木で作られた舍利塔、漆で赤緑黄黒に彩色されている。

浄土 十一月号 目次

表紙……十一面観音 滋賀 向源寺

家庭教育の基礎……………三枝樹正道……(二)

随想 心と身体と……………林 霊 法……(六)

中国綺談 火傷した幽鬼……………牧尾 良海……(八)

一隅をてらす……………宮林昭彦……(二〇)

一茶の生涯と信仰……………柴田 行康……(二六)

六百軒行脚を終えて……………小川 隆英……(二六)

近代高僧伝 小野玄妙……………大橋 俊雄……(二四)

童話 長者と商人……………北村 謙順……(二三)

実話 廁のお話……………吉野翠幹……(三〇)

仏像を拝して……………(三三)

悪は常に甘い……………(三五)

悟りは楽しみ……………(三〇)

月と仏さま……………(三九)

扉の御法語……………(二三)

表紙の写真……………(三二)

会員だより……………(三三)

聖典 講義 ひねくれ者のために……………竹中信常……(三六)

あとがき……………(四一)



三 帰を育てる

家庭教育の基礎

三 枝 樹 正 道

ここに二人の商人があつて、その一人は自分の利益のこ
とばかりを考えて、店の裝飾、品物の広告、客への接待等
に一生懸命努力しており、他の一人はこれに反し、常に顧
客のためを計り、少しでも良い品を、少しでも便利で調法
な物を、少しでも安価で売ろうと、苦心を払っておる。こ
の場合、前者は自分独りの世界に生活する者であり、後者
は顧客と自分との共同社会に生活するものである。従つて
両者の生活する範囲は異り、前者の住む所は自分独りだけ
の世界であつて、極めて狭い。而して後者は少くとも自分
と他人との共同社会に生活するものであつて、それだけに
広い世界である。この様にして、更により広い社会、即ち
町のためを思い、国の利益を計り、人類全体のためを思つ
て、一つの仕事をなすとすれば、その人はそれだけこの多
くの人々を扶助し、又その人々から扶助せられるのであつ

て、この人の生活は一層拡大せられて、より広い世界に、
より多数の人々と共に共同の生活を営むこととなるのであ
る。この様に、人は自分のことばかり考えておる人は唯一
人の狭い世界に淋しい生活をするものであり、より多くの
人のことを考え、その人々と扶け合いの生活をする人は、
それだけ広い多数の人の世界に生活することになる。
本来人は皆が相互に扶け合つて、共同生活を営んでおる
ものである。即ち他のすべての人々によって生かされて生
きておるものである。この真実の相を知らずして、自分は
自分だけの力で生きておるものと考え、自分独りの幸福を
希うて、他人のこと等少しも意に介せない人もある。而し
て寧ろ多くの他人から沢山の利益を獲得することばかりを
考え努力する人がある。然し、いかに努力してもその努力
は、自分の生活に関する面への努力であり、他人との共同

生活へは一步も入って行かない。故にこのようなま違っておる生活はやがて行きづまりが来るものである。又少しも伸びて行かないものである。これに反して、人間本来の相を自覚して、他人との共同生活において、他人の幸福を念願し、他人に祝福せられ、他人と共に幸福になる生活を営む場合には、その人の仕事は、その共同生活の範囲にまで拡大されて、その仕事は益々発展してゆくものである。ここに伸びゆく楽しみと拡がりゆく希望があるのである。

この無限の彼方に、無上の理想として仰ぎ奉る理想が仏であり、如来である。無量寿如来とは、すべての生きとし生きるものの無限の寿命の彼方にあつて、すべてのものの生命の根元となり玉う如来であり、無量光仏とは、すべてのものの幸福の彼方にあつて、すべてのものの幸福の基盤となり玉う仏を表明したものである。この最上最大の如来に帰依し、これを信奉する生活が信仰の生活である。而もこの生活が、人間の本当の生活相である。真理に徹した生活であり、真実に随順した生活である。ここに平和があり、楽しみがあるものである。故にこの仏と共にある生活を浄土の生活と云うのである。

人の子は、母親の温い慈愛の力によって、始めて人となることが出来るのである。若しこの母の愛情が無ければ、

人の子はその肉体的生命すら保つことが出来ないかも知れない。まして人として成長することは困難であろう。

動物でもその子の肉体だけはこれを育てるものである。又吾が子への愛情は実に強いものもある。然し彼等はただ本能的愛情によって動いておるのみである。人間の親はそうではなく、前に述べたように、社会の実相、即ち生命あるものの相互扶助の世界を自覚せしめて、この相互に相扶け合う尊い生活の自覚にまで吾が子を育てるのである。

凡そすべての苦悩や困難や不幸は、この社会の現実であるが、それは相互扶助、仏教で謂う縁起の実相を知らないことから起るものである。だからこのことを一日も早く、子供に知らしめて、吾が子をして、苦悩の無い真実の生活を送らしめることが親の願望であり、愛情である。この愛情を正しく指導することが宗教々育である。

すべての母親が、この尊い愛情を正しく活動せしめて、吾が子を育成するならば、それこそ忽ちにして浄土が実現するのである。然し幸か不幸か、すべての母親は、この正しい尊い愛情を所有しながら、必ずしもこれを充分に活用せしめておらないのが現状である。故にまづ将来母親となるべき女性をして、自らこの尊い強い愛情を有することを自覚せしめて、これを正しく活用せしむるよう、女性を指

導し教育することが何よりも大切なことであると云わねばならない。ここに女子に対する宗教々育が要望せられる理由もあるのである。

現状の不幸はあまりにも各人が利己的であることから出發しておるのである。他人の迷惑を少しも考えず、ただ徒らに自分の欲望を満たさんとするところから起っておるのであると云える。電車の中の混雑、乗降時の無秩序その他色々の大小の闘争の如き、すべて考えれば利己的な考え方、行動がその原因となっておるのである。

又すべての不安、これも亦各人が他人のこと等全く考慮の外において、自分のことをのみ優先的に考えるから、何時、如何なる場合に何をされるかがわからないところに起る現象である。殊に都市生活の中にあつては一片の親切すらも無いのではないかとさえ思われる生活状態がある。全く安心の出来ない暮しが多い。

又すべての不愉快な生活、これも亦各人が利己的行動に終始するところ起る現象である。現代青年の傍若無人の態度には、無礼と云うべきか、無知と云うべきか、何れにしても黙視するには余程の忍耐を必要とする位である。

まだこの他数え挙げると沢山にある不幸不安不愉快等の現実、その原因は何処にあるかと云へば、社会の真相、

即ち仏教に云う縁起の真相を知らないことにあるのである。社会は万事が相依り相助けて現象しておるものである。この相互扶助、相互依存の現実を正確に認識するならば自らその生活が現れて、各人勝手な利己的活動は許されないのである。否、自ら出来なくなってくるのである。

更に又宇宙間の秩序を知らないからでもある。即ち自然律、因果律、道德律と宇宙間、従つて人間の世界には、すべてのものがこれに順わねばならぬ律法がある。秩序がある。これを知らないから、利己的活動が、この秩序を乱さんとするものである。

以上の如く何れも、現実の世界の在り方に対する誤った見解、真相に対する無知不明から来る不安不幸である。だから現実の不幸不安を除き、幸福にして平安な生活を希むならば、縁起の真相、相互依存、相互扶助の世界を認識体得せしめねばならない。ここに宗教々育の必要が叫ばれるのである。

凡そ仏に帰依するとは、この宇宙の真理、世界の真相を明らかにして、真相を知らない不明を解除することである。即ちこれが、「謙虚にして真理探求」の態度であり、謂ゆる帰依仏の相である。帰依仏の相は、一切の真理の前に、すべての真相の前に心から頷くことである。この謙虚

な研究心が、次々に真理を発見發明して、物質科学の面においては、あらゆる文化面の研究となつて生活の向上となり、精神科学の面においては、利己的主我的な考え方が解消されて利他的な相互共同的な平和な世界を建設するに至るものである。

又法に帰依するとは「誠実にして精進努力」の態度であつて、宇宙、世界の真相は実に秩序正しいものであり、自然律因果律の厳正なる活動である。この正しい生き方、即ち法身の説法、自然の秩序正しい在り方に、精神を傾倒することであつて、それこそ人間の衷心の活動、誠実なる生活々動を希念する態度である。玆におのづから順法の生活が現れるのである。

又帰依僧とは「親切にして相互協同」の態度である。仏に帰依し、その教に帰依した者の生活は、即ち世界の相互扶助の真相を確認し、その正しい在り方に順う者の生活相は和である。而もそれは単なる総和でもなく妥協でもない。それこそ和合的調和であり、止揚的和でなければならぬ。それは単なる理解によつて結合された和ではなく、親切即ち共同の誠心によつて積極的に融け合つた和である。この和を希念すること、それを実践することが帰依僧である。

以上の三帰の生活こそは、仏教入門の最初にして必須の

型である。従つて学校教育の基礎に、又家庭教育の基礎にこの三帰の作法を授けて正しく信仰の生活に誘導するのである。かくして女性が、謙虚にしてもものゝ真相を究めんとする態度、又誠心を以て世間の一切に接する態度、更に環境の一切に親切を以て調和せんとする態度が養われて、母親となることとなれば、この母の信仰深い態度は、その子に対して、無限の母性愛を通じて、良き指導が与えられるのである。殊に乳幼児への感化は理解を通ずるものでなく、体験を通ずるものであるから、単なる知的、言語的指導ではその目的を達成することは不可能である。すべて、母の実践を通じて、体験を通じて、母性愛の中に作用して始めてその教育が完うせられるのである。

このように考えて来ると、宗教々育と小さい私心私欲を離れて、おほらかな氣持になつて、お互に助け合う楽しい平和な生活が出来るのである。これこそ人間本来の生活相であり、すなおな順法の生活である。而してこの生活を一日も早く体験せしむるためには、世の母親となるべき女性をして、この事を自覺せしめて、母親本来の育児の愛情を通じて乳幼児を教育することが最も肝要であることを痛感するものである。ここに女性の宗教々育が特に要請せられるのである。（家政学園長）



随想

心と身体と

林 靈 法

鬼の喧嘩

して使うためである。社会公共のためには協力することのないのが、けちんぼうである。自分だけのためなら、いくらでも浪費するというのが資本主義的人間のゆき方である。

菜葉の一きれ

匠であった」

と二人はその僧を拝んで教を請うた。

二人の若い僧が山中に高德の師をもとめて山道を溪流に沿って登って行った。すると溪流に一枚の野菜が、上の方から流れてくるのを見た。そこでしばらく立ちどまって、下の方に流れてゆく一枚の菜葉を見送っていたが一人がこういった。

「こんなに物をお粗末にする者は、高德な人ではあるまい。尋ねてきても無駄であった。帰るより仕方がない」

他の一人が何かいおうとしたとき、上の方から一人の破衣を着た坊さんが、小走りに歩きながら一本の竿をもって、その一枚の菜葉を追ってやってきた。

「そうだ。やはりわたしたちの求めている師

米粒一つ、菜葉一枚とても、天地の大生命の結晶であって、それは尊い仏の恩物である。絶対にお粗末にはできないのである。すべてを殺さず生かして使うのが仏教の精神である。

ところがこのゆき方は今日の経済とは矛盾するようである。生産力がすばらしく上昇してきているとき、中世的な封鎖経済的なゆき方は全く矛盾しているというかも知れない。そのことは一面そうとも見える。多量に生産し、大いに消費しなくては、或いは物ができすぎて困るだろう。

しかし仏教が物を大切にすることは、けちんぼうになることではなく、有益な仕事のためには、十分に大いに社会公共のために奉仕

ある旅人が道に迷って、荒れた辻堂に入って一夜の宿とした。夜ふけに一人の鬼が死人をかついで入ってきた。するとまた一人の鬼が入ってきて、鬼たちは死屍のとり合いから喧嘩を始めた。そして鬼たちは旅人をおこして、「この死屍はどちらの鬼のものかきめてくれ」とたのんだ。

旅人は驚き恐れながら、どうせ殺されるにきまっていると覚悟して、はつきり「前の鬼がこの死屍を持ってきたから、前の鬼のものでしよう」と答えた。これを聞いた後の鬼は案の定に怒りだし、旅人の手足をもぎって食べてしまった。これを見ていた前の鬼は、旅人を気の毒に思つて、自分のかついできた死屍の手足をもぎって、旅人の体につけてもと通りにしてやった。すると今度は後の鬼が、旅人の頭を、心臓を、と次々に食べてゆくの

で、前の鬼がそれと同時に死屍のものを引き抜いて、旅人の体をもと通りにしてやった。やがて二人の鬼は外に出て行った。

あとに旅人が一人残って考えた。自分の身体は鬼に食べられてしまったのに、前と同じようにここにいます。一体この身体は自分のものだろうか、他人のものだろうか。旅人は考えても解らず、頭が狂いそうになって辻堂をとび出した。しかし旅人は後で立派な和尚の導きを得た。

旅人の身体は鬼のために他人の身体と自由に入れかえられてしまった。しかし私たちも自分の身体が実は自分の身体でなくて、ある大きな力によって、ひたすら奔ろうされていることに気がつく。私たちは大きな組織の力のままに動かされている。自分の意志も、考へも及ばぬままに、ただ機械的に動かされているに過ぎない。

しかし現代人は果してそれで満足できているのか。一度、真剣に自己に還ってくると、気狂いのようにじっとはしておれないのである。人間は単に組織や機械だけでは割り切れない領域をもっている。

宗教生活とは、この宇宙と一体となり、自分の一挙手一投足のただいまの生活に、全宇宙の活動を現成してゆくことである。ここに見失われた真実の自己が回復され、確立されてゆくのである。

自己喪失の生活

現代はすばらしい科学文明となっている。

人間の生活がすべて科学によって解決されるような錯覚を与えられてきている。しかし、同時に人間の本当の姿が見失なわれている。

ニヒリズムが現代人の心を支配しているのがそれである。科学はすばらしく進歩したが、それに対して、実践的に生きてゆく人間の主體的なモラルというものがおき忘れられてしまっている。ある学生が牛や豚の肉を食うのに、人間の肉を食うのがなぜ悪いと質問したそうだが、現代においては、これに類した質問は当然出るであろう。科学時代においては牛や豚の肉も人間の肉も、タンパク質でありエネルギーになる点では全く同一であると考えられても不合理でないことになる。しかしこれは科学の盲信をもってする宗教やモラル

の領域への侵害であって、こうしたところに現代人の生活心理におけるおそろべきニヒリズムの様相を見ざるを得ないのである。

今日では人間のただいまに生き切ってゆく主体性なるものが見失われてしまっている。

科学の上に盛りあがったすばらしい機械文明は、もともと人間がつくったものだが、今では逆に人間が奔ろうされている。資本主義経済社会とて同じことで、もともと人間が歴史的につくってきたものだが、逆にまたこの経済社会を支配する資本という魔術的な力によって人間はみじめにあやつられてゆく。

一般の社会生活においては、新聞、ラジオ、テレビ等の生活のすみずみまで組織されたマスコミによって、人間の心理内容まで完全に画一的に支配されてしまっている。このような今日のはやりの言葉である人間の「自己疎外」において、現代人の人格とか、個性とか或いは情感といったすべてのものは質より量化せられて、一様に平凡化され、頽落されて行っている。そこにはただ「人間」一般が動いているだけであって、本当に私が、そして彼が主体性をもって生きているのではないのである。（東海高校長「大地」より）

中国
綺談

火傷した幽鬼

牧 尾 良 海

唐の開元の御代の頃、二人の士人があった。貧しかったので、河朔の地方を乞食して歩いたが、誰ひとり面倒をみてくれる者がない。そこで今度は黎陽県へとやって来た。

日はとつぷり暮れてしまったが、県城への道のりはまだ遠く、困りきっていると、街道の傍らに宏壮な屋敷があるのが目についた。早速近付いて門を叩くと、暫らく待たされてから下僕らしい男が顔を出した。

「日が暮れてしまつて難渋している者ですが、今宵一晩物置の片隅へでも泊めて頂けないでしょうか？」

士人が頼みこむと、その下僕は、「旦那様にお伺いして参りましょう」と言つて奥へ姿を消したが、間もなく庭石をつたつて来るくつ、の音が聞えて、衣冠を着

けた一人の美丈夫が現われた。悠揚迫らず、心憎いばかりに清秀なものごしであつた。

やがて下僕に命じて中へと招じ入れ、客人と挨拶のお辞儀を取り交してから言つた。

「長の道中、さぞお疲れでしたでしょう。御覧の通りの濺が伏屋で、折角御光来の貴殿には失礼だが、何卒御ゆるりとお休み下さい」士人の方は、心ひそかに「何だか少し様子が変だ。よくよく注意して居らねばいかぬわい」と考えたが、さあらぬ態をよそおい、主人の後に続いて客間の席に坐つた。

主人公は頗る達弁で、齋周以来の色々な出来事をまるでまのあたり目にした様に、いとも爽やかに談じた。士人が名前を尋ねると、「私は潁川の荀季和と云う者で、父親の官職のゆかりで、こゝに居を定めたのです」

と言つた。やがて主人は、酒や肴を命じて運ばせた。甚だ凝つた立派な御馳走であつたが、何故だか、さっぱり味の無いものばかりであつた。夕餉が終ると、寝具が運ばれて来た。侍女も一人、世話をする為につけられた。客人は、女が幾らかなれて来た頃を見はからつて、

「こゝの御主人は、今、どんなお役に就いて居られるんだね？」

と訊いてみると、

「河公の主簿をなさつておいでです。でも決してそれを口になさつてはいけませんよ」というのである。

真夜中になると、急にどこか近くの外の方から、ひどい責め苦にさいなまれてゐる激しい呻き声が聞えて来た。驚いて窓からそつと外を覗くと、主人公が長椅子にかけており、その前に一人の男が髪もさんばらに裸で打ちのめされていて、左右から色々な怪鳥が鋭くい嘴でその両眼をつつ突いてゐるのである。主人は憤怒の形相も凄く、

「これでも尚、私に暴戾をはたらくのか？」と、詰めよつてゐるのである。

眼から迸る血が床をくれないに染めていた。たまげた客人が、思わず、

「この人は何ですか？」

と訊くと、

「貴君には何の関係もないことです。余り他人の事に立ち入らないで下さい」

と言うばかりである。尚もしつこく聞くと、

「これは黎陽の県令です。無暗に猟が好きで、何度となく獣を逐って来ては私の敷地内を荒し廻るので、こうした罰を受けるのです」

と言った。

夜が明けて、ふっと気がつくとき、あたりは荒涼たる原野で、大きな塚が立っている所であった。通りかかった村人に訊いてみると、やはり古えの荀季和という人の墓に間違いはなかった。

苦悩を超える

「災難にあう時には災難にあうがよく候、死ぬる時には死ぬがよく候」 (良寛)

受くべきものは正しく受けてゆくという自然随順の心となりえたならば苦悩は苦悩でありながら、苦悩を超えてゆく境地となる。

(藤井実応)

黎陽の県城へつくと、県令は、果せるかな眼疾で、会えないという。

「その病気を治して上げましょう」

と申し出ると、県令は大いに喜んで、早速

引見してくれた。例の墓域ですごした一夜の出来事を具さに話すと、県令も、

「まことに、貴君のおっしゃる通りの事実があったのです」

とて、狩猟の件を認めた。県令は、ひそかに有司に命じて薪を何百束となく用意させ、例のお墓の垣の所につみ上げ、一日、大勢の下僚に命じて一斉に薪に火をつけさせて、遂にはその墓域の形勢も一変するほどに焼いてしまった。これと同時に、県令の眼疾はうその様に治ってしまった。

県令は、その士人に莫大なお礼をしたが、墓を焼いたことだけは秘して告げなかった。

この士人は、その後又その近くを通りかかったが、一人の男が頭や顔に火傷のひきつりをこさえ、ひどいほろを身につけて棘の草原にうずくまっているのを見た。

その人は真つすぐに士人の方へ近付いて来たが、士人の方では相手が判らなかった。

「貴君は、もう先に私の所へ一宿せられたことがあるが、憶えておいでですか？」

言葉をかけられて、士人の方ではっと気がついた。

「お、本当にあの時の御主人だ。一体、どうしてこんなひどい様子になられたのですか？」

「あの県令めにひどい目に会わされたのです。然し、何も貴君がそうさせたのではないということも判っているのです。いわゞ、私自身の運が窮したと諦めるべきでしょう」

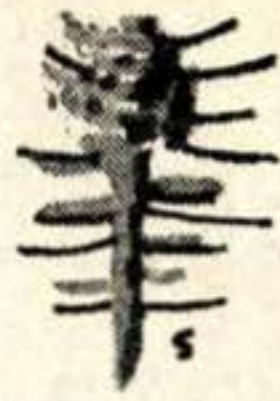
その人物は淋しげにそう言い終ると、やがて次第に影うすれて虚空へと消え失せた。

士人は、この時に到って、つくづくと恥じ且つ後悔をした。彼はさっそく持ち合わせた酒を大地にそそぎ、自分の古い着物を焚いたりして、哀れな幽鬼に供養を捧げてやった。

彼はどちらにも義理があったが、自分のおせ、つかいからとんだ縄張り争いに引きこまれた訳で、

「俺も、もっと旅人の心に徹しなくちやあいけないなあ」

と呟いた次第であった。(広異記抄)



一隅をてらす

—— 勤労におもう ——

宮 林 昭 彦

一

白隠禪師が、あるとき修行僧に対して、両手をたたいて「この片手の声を聞いてこい」という公案を与えた。すると、ある人が、せせら笑って、坐禅をするひまがあったなら、それだけ商売に精を出した方がまだ、といって、「白隠の片手の声を聞くよりも、両手をたたいて商いをせよ」とひやかした。

これに対し、白隠禪師は「商売が両手をたたいてなるならば、片手の声は聞くに及ばず」と、むくいたという。

『古いエピソードであるが、いろいろと考えさせられる問題があるかと思う。』

片手の声とはなにを意味するのであろう。音というものは、両手をたたいてこそ聞えるものである。片手に音のあろう筈がない。すると、それは、声なき声、音なき音を聞

けということである。

これを生活に引き入れて考えてみるならば、商売の底に流れるもの、経済生活の基調となるものを、宗教的体験を通して、しつかりと握れ、ということになるであろう。

商売が両手をたたいて、いつでも楽々と儲かるとは限らない。どんな職業にしても、デフレ、インフレの風波の中で、いつでも甘い人生を送ることはできない。底の浅い経済生活は、たえず他の横波をうけて動揺するように、あげ底の浅い基礎しかもたない人の一生ほど危いものはない。

政治や経済至上主義から見れば、不必要にも思われる「片手の声」への非難に対して、「甘い人生なら、それは人生ではないから、宗教の必要はない」というのが白隠禪師の返歌であったと考えられる。人生の厳しさに気づくときこそ、底の深い自分がもとめられ、宗教の必要性を感じ

るのである。

職業に従事する手も、仏を拝む手も同じ手である。されば、勤労する生活のなかに仏道が体得されてこそ、底の深い「社会人」といえるのである。勤労のシンボルともいえる。千手観音を拝んでもわかるように、その、たくさんのみ手は「働く手」であつて、いろいろの道具を持って居られるが、その多種多様の働く手を統一するものは、まん中に度ましく合掌せられるみ手である。このことは、まことに意味深いことである。

二

「ひとりでは何もできない。しかし、ひとりが始めなければ何もできない」この言葉を、むかし何かの本で読んだことを思い出し、いまなお、つよく記憶のなかに甦つてくる。機械の日進月歩の改良にしても、待遇や労働の問題にしても、ひとりでは何もできるものではない。

しかし、誰れかがやってくれるであろう。都合がよかつたら自分もついてゆこう、などという考えを、みんなが持っていたら何もできるものではない。

ものごとを無批判に、ただ数の力を誇るところに、不必要に騒ぎが大きくなって、ますます混乱を生ずるのであり、そうかといって、思慮もなしに、「俺」がといって飛

びだす軽薄な思い上りの一人の行動が、どれほど多くの災厄と迷惑を生んでいることであろうか。

とまれ、この「ひとり」が大切なのである。ただ、ひとりが、職場のなかの、社会の、世界における幸いと不幸とに直結していることを忘れてはならない。なんとすれば、それは、ひとりといっても、単独にひとりがあるのではなく、社会に生きている「ひとり」なのである。

戦後、焼け跡に作業をしてこんな思い出がある。ようやく手にいれた、なすの苗を移植して、たんねんに肥料をあたえて育てたが、収穫は非常に不出来であつた。すると、よく家の前を通るお百姓さんが教えてくれるのに、「一本一本の根本にだけ、肥料をあたえてもだめです。畠全体を肥やさなければいけません」ということであつた。その翌年は、なかなか見事な収穫を得ることができた。

このささやかな経験を通して感じたことは、自分だけ幸福になろうと思つても、社会全体を忘れている利己主義者は共倒れをするということである。労働者だけの、資本家だけのという社会はない。同僚や先輩のいない職場はない、ひとりでは何もできないのである。

みんなが、尻ごみしている時に、利己をしばらくあとにして、まず自分の周囲の社会を高め、尽してゆこうという

念願の「ひとり」が謙虚に立ち上ったら、おのずから事は運んでゆくものである。利他行を重んずる菩薩の精神を、勤労を通して具現してゆくのが、勤労人の胸に宿る仏道の修行でもあろう。

「ひとり」、これは社会の単位であると共に、また社会の終結である。この「ひとり」の構成は何と大切なことであろうか。

三

ある王国をたずねた一貿易商人が、宝玉をみせた。国王や王子達は大変珍重したが、一王子は、気にもとめていなかった。父王が聞くと、「りっぱな宝石ですが、水や火にあえば、値打ちも変わるでしょう。また盗まれれば、それ迄です。そうした外部の影響に左右されるのは、真実の宝ではありません」と答えた。

しからば、真実の宝とは何か、と尋ねると、静かに胸に手をあてて「この心の中の宝です。これは、くさる事も盗まれる心配ありません」といった。

ここに伝える、心中の宝は、いろいろな理解することが出来よう。

青年であるならば「信念」としてうけとつてもよい。職場にあって「この仕事については、他にひけをとらない」

という自信と力量のある人は、宝に価する存在である。誇らしい信ではなく、深い反省と責任とが内にひそんでいることはもちろんである。

現在、求められているのは、この信念からくる責任の気持ではなからうか。分業化すればするほど、責任感も薄められて、一人ぐらい手をぬいてもわからないだろう、というような浅はかな考えが大勢を支配したら、どんな結果になるであらう。

みんなが、一人酒一合をもちよるといふとき、その中の一人が、自分だけ水を持っていてもわからないだろう、と思っていいたら、十人分まとめてみると、ただの水が一升びん一ばいであつた、という話がある。

一人の無責任の考えが十人集計されると、こうしたことになる。

メード・イン・ジャパンというレッテルが、世界の市場において信用をうるか、否かは、その製品に関係ある人びとのおおくの信念の累計でもある。製作品への信念と愛情とが、勤労を通してやがては、日本民族、いな、世界人類愛へと拡大されることとなるのである。一日の労働は、一日生きることへの当然のつとめである、といったら云いすぎであらうか。（大正大学講師）

扉の御法語

念仏の行者には、観音勢至、かげと形のごとく、しばらくも捨離し給はず。余行はしからず、又念仏する者は、命をすてて已後、決定して極楽世界に往生す。余行は不定なり。およそ五種の嘉譽をつたへ、二尊の影護をかうむる。これはこれ現益なり。また浄土に往生して、乃至成仏す。これは是当益なり。(選択集第十一章段 雑善に約対して、念仏を讃歎し給の文)

観經の流通分、つまり観經の結論ともいふべき最後の部分に次の句があります。

「もし念仏せん者は、まさにしるべし。この人は人中の芬陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩はその勝友となる。まさに道場に坐すべく、諸仏の家に生ず」

お念仏を唱える人は、花でいうなら白蓮華のように気高く美しく珍しいもので、人中の最勝人です。観音勢至の両菩薩さまは、すぐれた友達となって導いて下さいます。従ってその人は命終ってから浄土に生れて必ず成仏できます。

この一句について善導大師は「正しく念仏か仏果の意味です。

三昧の功能超絶して、実に雑善をもって比類となすことを得るに非ざることを顕わす」と説明されています。そしてお念仏を唱える人を白蓮華に喩えたことは、この華が尊く珍しいと同様に「もし念仏する者は、即ち是れ人中の好人、人中の妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の最勝人なり」と説かれています。また両菩薩が勝友となることについては「専ら弥陀の名を念ずる者は、即ち観音勢至、常に随つて影護したまふこと、また親友知識の如くなることを明す」とされています。更にまた道場に坐し、諸仏の家に生ずるとあるのに対しては「今生に既にこの益を蒙れば、命を捨てて即ち諸仏の家に入る。即ち浄土是れなり、かしこに到れば、長時に法を聞き、歴史供養して、因円かに果満す。道場の座、あにはるか(遙)ならんやということ

善導大師のこうした解説に対して、更に上人が詳細に説明されたのが「雑善に約対して念仏を讃歎し給の文」であります。この文は沢山な例証によって念仏の勝れていることを説き、その結論の部分が上記のご法語です。

念仏の行者に対して最勝人とまで名譽を与えられ、観音勢至が影の如くお護り下さっていることが現在のご利益であり、命終つて成仏することが当然のご利益であります。上人はこれを現当二世の両益といわれています。

私どもは現世のご利益というと、すぐお金が儲かったり、病気が治ったりすることのよいに思い勝ちです。従つてお念仏を唱える私どもは、信仰によって現世のご利益を求めない等といひます。しかし上人は現世のご利益ありといわれている点が大切です。観音菩薩は慈悲の仏さまであり、柔和忍辱の相をお表しになっています。勢至菩薩は智慧の仏さまで、無上力をお与えになります。この両菩薩が親友知識となつて、物にかげがさす如く常にお導き下さるのですから、これ以上のご利益はないわけでありす。



近代高僧伝

小野 玄妙

大橋 俊雄

横浜市中区州干崎に金次郎が生れたのは明治十六年二月二十八日のこと。父は小野兼吉といい、幕藩時代には甲府におり旗本をつとめていたが、御一新となり職を求めて横浜に出て来た。しかし生活は余りにもきびしく、加うるに十四歳の時金次郎は慈父を失い、そのためもあって鎌倉光明寺の吉水大智の弟子となった。名を玄妙と改めたのは此時であり、入門してからの彼は元来読書が好きだったせいもあって、手当り次第に経論を読みまわった。寺にあった藏經にはすっかり目を通し、「白文でお経をすらすら読む」といって師匠を嘆ぜしめたこともあったが、初めのう

ちの読書は誰でもがそうであるように濫読に近いものであり、この頃大乘非仏説がとなえだされた。この問題に興味をもった彼は、早速に仏説だという阿含經を読んでみた。しかし待てよ、阿含は仏説だというのに雜阿含の中には阿育王のことが出ているではないか、これは変だ、大乘が非仏説というならば小乗も非仏説なのではあるまいか。学者のいうように初めて成文の仏典ができたのが数世紀をへた後であるとしたら小乗經典にした所で、無条件に仏説というわけにはゆくまい。このようなことを論旨に「大乘非仏説を駁す」という論文を五ヶ月にわたり「宗教雜誌」に書

いたのは三十六年八月のこと、彼が東京支校に入学したのが三十五年九月であつたから、支校二年在学の時であり、支校といえは今の中学校にあたり、晩学とはいいい、二十一歳という若年のときであつた。

以来彼は「二楞学人」の名で屢々雑誌に投稿されたが、論文は大学者にもひけをとらぬような、新らしい見解をもった良い論文を書いているにも拘らず、二楞学人の正体は誰人であるかつかめない。それを良いことにして俺だと名乗りでた人もあつたが、その人が「新仏教」の同人であつたので、その匿名が玄妙であることを知ったとき一悶着がおこつたという。無名の新人の替玉とは何と愉快なことではあるまいか。その頃彼は目黒長泉院の所化で、支校から高等学院にと学んだが、在学二年にして、主として経済的な理由で退学を余儀なくしてしまった。当時彼は目黒から芝まで歩いて通われ、或る時の如き鎌倉に帰るのに徒歩できたが、六郷橋を渡るのに金がなく下駄を質におき草鞋で帰ったこともあつたという。

越えて三十八年七月には仏教年代考を発行

し、大正七年四月には宗教大学教授となった。この頃から彼は仏教の發達とか經典の成立とかいう問題は、仏典によって研究することも一つの方法ではあるが、彫刻や絵画にのこされている仏像や風俗そのようなものと、經典の記事とを比較することによっても推定できるのではあるまいか。現在この面には誰も着目していない、よしこの面から研究して見ようということ、国内は勿論朝鮮、支那にも足をのばし、実地調査の結果ついに大乘仏教は大月氏の地に貴霜王朝時代成立したことを想定するに至った。更に望月信亨にも師事して大日本仏教全書や仏教大辭典の編纂にもたづさわたり、高楠順次郎や渡辺海旭にも協力して大正新修大藏經の編集にも尽瘁されたが、この藏經の編集にあたり、大小乗というような分け方を廃し、正倉院聖語藏にあった天平写經をもって対校し、それに図像部を設けたことは彼の遠見であり、愛煙家として定評のあった彼も天平藏經を博物館に借りだし校訂する時の如き、決してタバコを口にすることはなかった。

望月にくらべて彼は十四歳の年少であり、

彼にとって望月は恩師であつた。しかし彼には言い出したら後にひかないという強靱性と精力的な頑張りづよさがあり、これがもとをなして二人は衝突し、師と袂をわかち大学教授の職をすて高野山に登り念仏生活に入ろうと決心された。仏教美術・仏教神話・佛教天文学・佛教文学にも通じた学者であり、此等の學問は彼によって新らしく開拓された分野でもあつたが、彼にはもう一つ密教學でも大きな足跡をのこしていることを忘れてはならない。高野山にのほった孤独の學人玄妙をこの時とばかり辞を低くして招いたのは高野山大學で、時に昭和二年四月、七年五月には「佛教の美術及歴史」によって文學博士となつた。

彼は碁と將棋を好まれ、毎日バチバチやられたが、殊更定石を研究するということもなく、時には仏像仏画の鑑定をたのまれることもあつた。中に模写模造のあることは勿論である。

そのような時、彼は決して對手の人を失望させるようなことを言つてはならないといましていた。或時彼の來場を聞き仏画をもつ

て汽車に二時間余もゆられて訪づれてきた人があつた。見ればまぎれもない模作、彼の留守中の事である。留守をしていた侍者は正直に「誠にお氣の毒ですが、これは鎌倉時代のものを模写したものです」と語ったところ、その人はさも不満だという様子ですごすご帰られたが、後にこの話を聞いた彼は「馬鹿なことをいったものだ。これからそのような人が見えた時には、誠に結構なものですと当らずさわらずに言いなさい」と注意をしたことがあつたという。

そのように骨のある反面慈愛をもっていた彼も、晩年は「余生は奈良の近くに廃寺でももらつて、そこでわび住居して送ろう」と誰彼となく語っていた程、古都奈良をこよなく愛し、屢々此地に足をふみ入れ、古社寺を訪づれ、多くの仏像に接した。そして多くの古寫經を眼福し、古文化財の保護につとめたが、遂に寺に住むこともなく、昭和十四年六月二十七日腦溢血のため五十七歳を一期に、その一生を終えられた。法名を端蓮社諦普上人篤阿玄妙老和尚という。



7月10日 いよいよ
正太図書館前を出発

六百料行脚を終えて

小 川 隆 英

行脚を思い立ったのは、三年程前からの事だが仲々その実行に踏切ることに迷っていた。大学生活も三年目を迎え今年やらねば卒業論等で行じ得ないと思ひ遂に決行することとした。行脚への動機と言つて特に取立てて云うこともないが、私は小学生の頃には日曜学校に入り、中学、高校の頃には学校の友達等が集り、寺院生活者であるだけに私に「仏教とは何か」「いったい仏教は我々に何を教えているのか」等と学友から色々突込んで聞かれた。そこで私は、私なりに仏教を研究して見ることにした。そして私は仲間を集めて仏教聖典や友松円諦師編法句経等を中心に週に一度ずつ集会を開いた。自坊で調べてきては皆で話し合うのだが、理解の出来ないところ、難解な字句に出合ふと、只お寺でのんびりと

生活してきた私には父の話す事等を聞いて知つてゐること位のもので、ほとんどは理解出来ないし、私自身も疑問な点が多かつた。分らないところは大学に入ったら勉強してくるからといつても口癖のように言つていた。私はこの頃から自分は将来坊さんになるんだと自覚し、又どうせなるなら真実の坊さんに成るんだと数人の人には真剣になつて話したものだ。

さて大正大学に入学し、よしやるぞと張り、学友達と夜遅くまで私達の知りうる、分る範囲内で色々とその地方々々による現在の寺院慣習、そして私達は将来の僧侶として休みに帰山したら、どんなことをやるべきか、又将来我々が運営すべき寺院形態について議論した。児童研究部に入ってから夏季休暇等

には子供会等をやり乍ら色々な地方を巡つたが、その折々先輩の諸大徳方は我々の若い頃はと学生の頃造られた童話の本を出してみせたり、自分の寺はこのようなやりかたをしてゐるが、これからの若い坊さんは皆さんのように若い方、特に子供達への教化活動を真剣に考えるべきだ等教えてもらった。こうして地方々々の寺院の御世話になり乍ら御住職方から幾多の教えを得、子供達と話している内に、私はいつの間にかやらねばならぬ幾多の事を学び、そして又、教化者としてやりたい意欲を学生々活の思い出の中に深めていった。しかし、この研究旅行も年に一、二度、子供会中心なので、どうしても町や村の人々の寺院に対する関心とか、寺院運営と教化活動を知り度いこと、又、学校においても規定



一緒に子どもたち
越谷にて

の単位をとり、四年を過せば卒業出来、僧侶としての資格も与えられる。これだけで仏教者として寺に入り、大衆をリードし、否、只話し合って行ける事すら出来るだろうかと不安と恐怖で疑問はつのるばかりである。勿論次第々々に分って来ることであろうが、今の内に少しでも多くの寺院を訪ね、寺院の在り方について御住職方や町の人々に親しく接して教えを請い、今までささやか乍ら学んだことを實際を通じて体験で裏付けよう、それには時間をかけても読経行脚を続け乍ら納得のゆくまで教えを請おうとの決意を定め七月五日に発足することにした。その日早朝、郷里の父母や姉弟から門出の激励電報までもらったが、舎監の村瀬先生から計画のミスを指摘され随分と指導やら配意の御厚情をいただ

き、準備の為出発を延して七月十日朝、大正大学々生寮を寮生に見送られ出発した。

碧空の下、今日のこの門出には、この上ない天候に恵まれ校門前にて四誓偈を誦し自ら意を強うした。予定としては大体国道四号線に沿って北上し、自坊岩手県花巻まで約六百軒（途中国道から外れて立寄りたい寺院がある）、二十三日間を予定とし一日平均三十軒位を歩行することとした。持ち物と言えば着替の白衣一枚と五万分の一の地図を五十枚張合せた地図と寺院名鑑の抜き書、奉納経、それに小型カメラを持した軽装である。

第一日は草加市の予定であるが歩いた経験の無い私は果してどれ位歩けるのか不安であった。四誓偈の訓読を誦し乍ら只ひたすらに歩いた。道行く人々は私を見、まだ若いのにねえとか、くすくす笑っている人もいた。私は若いからこそやるんだと自己を励まし乍ら、朝食も昼食もとらず休みなしに歩いた。そのせいか思ったよりも草加についたのは早く、草加市内の各寺院を訪ねることにした。雲水の行法行脚僧としての礼儀作法も知らぬので、何れ禅寺にでもお伺いした際御指導い

ただこうと無礼な事を許して貰い、唯名刺を出し、御住職にお逢いして納経をいただき、世間話をし乍らそのお話の中にそれぞれの地方の特色を見い出そうと努めた。

草加に入って先ず真言の御寺院を訪ねた。ここは正大卒の御住職であるだけに随分と御配慮をいただきそのお蔭で同宗真言のお寺さんに泊めていただくことになったが、その御親切は最初だけに忘れられないものがあつた。子供達は遊び道具や本を持って来て私の相手のつもりで遊んでくれた。リユウちゃんと呼ぶので「ハイ」と返事をしたところ、この子供さん竜三君を呼んだのだと解り大笑いになった。

翌朝看経を済まし二日目の旅に出る。遠く東に山々を眺め、田畑の中を通っている学童用の土手道を進んだ。丁度下校時なのであろう、子供達が三、四人私の後から物珍らしそうに附いてくる。「授業はもう終わったの」との話かけから近辺の地理や学校のことを聞かして貰った。「中学校の嘉村先生もお坊さんだよ」「オレ、先生衣着て歩いてるの見たことあるんだから云々」と多分我々の先輩であ

る報土院さんのことだろう。その内に三、四十人の子等が私の回りに集まって来た。春日部も近いと言うことだし、天候もよく、青々と繁った稲田の上を流れるように吹く涼風も心地よい。私は子供達とそのまま別れるのは名残惜しくもなり、アラビヤ人の中に伝わる昔話より月夜の兄弟の話をした。子供達は喜び「何で歩いてゆくんけ」「金かからんからか」「勉強だんべ」と方言で話しかけてくれた。そしていつの間にか私を先生々と呼んでいた。「今日はオレの家泊ってけれ、お寺でなくてもいいんだんべ」と、私は嬉しくて涙が出そうだった。「そうだ、皆に写真写してあげようか」と二、三枚写したが「先生のも記念にとつてやるべ」「先生真中だぞ、皆並んで」と一人の子がシャッターを切ってくれた。子供達のにこにこ顔、笑い声は私の心に気持よく跳返る。「さあ皆で歌を唄って歩こう」いつしか、鈴の音も止み、誦経も忘れ、子供達と一緒に私も歌を唄っていた。予定があるので子供達の家に寄ることは出来なかったが楽しい思い出となった。子供と別れてから、又我に返ったように経を誦し春日部

へと急ぐ。こうも知らぬ私に積極的に話かけてくれたのも東京に近いせいであろうか。これに引かえ十三日目であったが行脚中、五、六人の子供達が私を木の蔭から隠れ隠れ珍らしそうに見ていたが、私が振返るとちりちりに逃げてしまった。ここにも地域の差が感ぜられた。又十五日目仙台市（仙台と言っても町からは大分離れた場所だが）の或る寺の御住職がこの辺の子供達に仏様の前で合掌することを教えたいと言うので本堂で子供会を開くことにした。始め子供達はテレ奥そうに仲々堂内に入らなかったが、皆で一緒に遊びましようとは度度も呼びかけて漸く中に入ってきた、だが一人小さな子が外で泣いている。「どうしたの」と聞くと堂内に入るのが恐いと言う。こうしてみると子供と寺院のつながりが如何にあるかがはっきりと感ぜられる。しかし乍らこのようにお坊さんを恐がったり、お寺を幽霊の出るような恐い場所と心に懐いている人は、ほんの一部であり、現代の寺院は寧ろ、塾とか子供会を熱心に開いておられるので寺院と子供達の間柄は親しみ深くなっているようである。

最近はこのように寺院が教化と経営上から幼稚園等大分開くようになっていくが、唯、日曜教團や子供会を開催している寺院が案外に少ないのは遺憾に思われてならない。勿論この頃は子供達も勉強や補習等と忙がしく、中々集めるのも一ト苦勞だし、テレビ等による視聽的感覚も進歩して来た今日、教材資料無しの運営は至難であると思うが、先日の法然上人七百五十年遠忌の教化大会で宗務所では子供会の指導書を発刊したいとの話であった。そのことを期待しつつ、子供の頃より寺院に来る習慣を付け、寺院を心の故郷として育てて行きたいものだった。盆踊りについても、最近では寺院とは関係なく市町村で行っている所が多く、曲目等も盆踊りとは云え各地の民謡踊りと言った色彩が強く、仏教本来のものとは程遠い感がある。盆踊りだけでも寺院らしい催しをしたいものだとして、二、三の寺院で話し合った。或る日は田畑で働いている人々と畔に腰をかけお茶をいただき乍ら話をしたり、道行く人々と語り合い、或時は好意をもって迎えられ、或時は乞食と間違がわれ、乞食の分際で

何をすまして歩いてるんだ、と二、三の乞食に罵倒されたりもした。

このような行脚の中で矢張り心配だったのはその日の宿坊のことであった。出発の際学友に泊るところが無かったら野宿をするさ、と平気な顔をしてはみせたものの、準備とてない私には不安な一つであった。しかし野宿をしてみても私は大変よい経験をした。それは丁度予定も後半に入った頃のこと、その日は途次寺院もなく休みなしに歩き続けたが日暮近くなっても寺院のある所まで着かず、民家にでも宿を乞おうと訪ねてはみたが早朝から夕方遅くまで働く農家のこととて留守番の子供かお婆さんのみでそれも成らず、止むをえず寺のある所までと不安で胸を一杯にし乍ら足を速めた。漸く左手の山の上に一寺を見つけたのは、もう大部暗くなっていた。足をひきひき辿りついて一夜の宿を乞うたがどうしても聴いてくれず、遂につれなくも断わられてしまったのである。今日は無理をしたので足は疲れているし、お腹もひもじくなっている。ああ無慈悲な人、と少々腹が立つ、心配と不安は私から「和顔愛語」を奪い取り、



無事行脚を終えて7月30日

外より御本堂に向い読経し、淡い蠟燭の灯に照らされた御本尊様を拝し、ハッと強く心をひかれたのであった。何と温顔なのであろうか、「怒り」というものは微塵も無い、柔和な相、読経している私の心は落着きいつとなしに怨みの心も消えて怒り気無くこの寺を辞し、村の外れの木陰に横になりどうにかして休もうとした時ふと蓮月尼の歌が浮かんだ。

宿かさぬ人のつらさを情にて

おほろ月夜の花の下臥

丁度野宿の木蔭に見る山辺の月、村の民家のあかりが点々と灯っている景は、何んと静

かな美しさであろう。私は思いがけない風流を、宿を断わられたことを機縁として味わうことが出来、今考えれば、却って深い情緒と恨んだことの済まなさを、再び蓮月尼の歌に思いしらべた。

ささやか乍ら初志貫徹のため敷と闘いつつ夜を明かしたりもしたが、幸い大部分の寺院では親切に世話していただき、中でも福島県の同級同寮の佐藤君宅では厚意に甘えて随分と厄介になった。コースも丁度ここで半分、前半の疲れをここでぬこうと、友人の心安さからゆったりした気分で二日間滞在し、方丈様より寺院経済に関してお話を伺った。

又宇都宮の寺院で家族皆様の心からのお迎えをいただいたが、特に自坊に於ける本堂再建の上にここでの本堂建築についての説明は有意義であった。

行脚中寺院を訪ね感じたことは寺族一同の宗教的家庭的雰囲気である。特に奥様の占めるものが如何に大きいかと言うことである。客への細かな心遣い、このことが信徒に対する大きな教化である。寺だけの問題ではないと思うが訪問して受ける第一印象は矢張り奥

様にあると言っても過言ではなからう。

舗装された道では太陽の直射とアスファルトからの照返しに目も眩み、道の悪いところでは埃に悩み、三十四、五度の直射や道中の雨もつらかったが犬に噛まれたのは又恐かった。ともあれ、晴雨にかかわらずみ仏のご加護と人々の情にほだされつつ唯ひたすら愚鈍浅学の身に鞭打ち自坊の、門をくぐったのは出発以来二十一日目の三十日午後六時過ぎ、家族や檀家の人々に迎えられたあの感激は筆

舌に表わすに余りある。

墨染の衣や白い脚絆は汗と埃に真黒に汚れ鏡に映った私の頬はゲッソリおちていたし体重も七キロ余減っていることを帰山して知った。然しいろいろ苦しいこともあったがその土地の人情、風俗に直接ふれつつ仏教寺院の現状を見学出来たのは大きな収穫であった。私は今独り書齋で奉納経を前にして二十一日間に訪れた百六十余ヶ寺の宝印と御住職のはなむけの言葉に、仏教というものが唯、博

物館の見世物となり、歴史家の資料になるだけであつたとしたら宗教の滅亡であると思う。生きた仏教、生かす仏教として真にその役割の一端をしっかり負うための学究に励まねばならぬ事を今更の様に心の奥深く刻んだ。そして、学長初め諸先生から下すった奉納経冠頭の一句一句と行脚中の各位の御厚情が私の生涯に大きな光りとなって導いて下さる事を信じて、感謝と共にこの筆を擱く。

(大正大学三年生)

悟りは楽しみ

病のないのは第一の利、足を知るのは第一の富、信頼あるのが第一の親しみ、悟りは第一の楽しみである。

何が利得かといって、自分の身体が健康で日日の仕事が愉快に行える程、すぐれた利得は他にない。金品によって購うことのできないものが健康である。いかなる親友からも預けてもらえないのが健康である。そしてまたブラブラ怠けていては、ほんとの健康に恵まれない。よく学び働き、勤労をはぐむとともに

に栄養をとってこそ健康が訪れる。身体病気が第一の貧乏であるが、心の病もまた同じく貧乏のものである。

巨万の富を蔵に貯え、宏壮な邸宅に住んでいても、貪る人にはこれでも不満であつて、常に金を求め物を欲している。このような人を富者とはいいい難い。いかに美食を求めても食得る量は僅かであるし、栄養となるものは一部分にすぎない。ある小説に「食べて満腹になると、別室で吐いてまた食べる」大人のことが記されている。これでは美食もかえって苦しみであらうと思う。いかに邸宅を大きくしても、自分の身

体をおく所は僅かでしかない。あらゆる部屋を豪華に飾ってみても、終日眺めて離れずにいるわけにゆかない。まず以て身分相応に足ることを知るのが必要である。貪らぬ人こそ第一の富者であるといわねばならぬ。

表面をどう繕っても、お互に信頼する気持ちがなかつたら友人とはいえない。それは利害のために、または諂いのために交わっているに過ぎない。人と交際するならお互に信頼することがもとにならなくてはならぬ。信頼することを知らぬ人は、また信頼されぬ人である。どんなに多くの人と交っても常に孤独であるし、常に相手にされない。

十一面観音像（国宝） 滋賀向源寺

同じ東京都内でも、浅草、池袋、新宿、銀座とその服装を比較すれば、さびれたとはいえ、何といっても銀座にかなうものはない。銀座を流す美女の容姿は全く美しい。こんなに美しい人がこの世にいるのだろうかと思うほどだ。その姿はまさに観音様のような位だ。

を保っている。肉づきのいい体も誇張し過ぎた嫌味がなく、むしろ画家の前に立ってポーズを作っているモデルのような、生き生きとした柔かさを感じさせるものがある。わずかに人間らしいところは、右の手が膝までとどいているところだけである。

この十一面観音像は滋賀県の向源寺にあるもので、奈良の法華寺にある十一面観音像とよく似ている。法華寺の像は、光明皇后の姿を刻んだものという伝説があるが、慈悲深い皇后の徳をたたえて後世つくられたものであろう。それにしても実によくできたものである。しかし向源寺の十一面観音像は、それよりも一層洗練された感覚でまとめられ、その上さらに柔らか味をも加えたものである。

慈悲の仏様である観音様にまつわる逸話は数多くあり、昔から多くの信仰を集めていたことはいうまでもない。貴族や武士はいうにおよばず、庶民にいたるまで観音様の慈悲にすがったのである。僧侶でも六角堂の救世観音のお告げをえた親鸞の物語は有名である。それはそれとして、美しい仏像の中の仏像である観音像の中でも、向源寺の十一面観音像はまさにピカ一といってもよいであろう。

長く美しい三日月形の眉とすっきりと通った鼻すじ、それを受けている口もとは、きつい線ではあるけれども、ふっくらとした下ぶくれの顔をびりりと引きしめ、誠によい調和

現在ではどんなに逆立ちしてもこのような仏像はできないであろう。それにはいろいろな理由があるけれども、結局は時代がそうさせていったのである。古代から中世にかけての仏師というのは大変な身分であった。仏師

というのは仏像を彫刻する人には相違ないが、古くはこの彫刻の親方というのであり、誰でも簡単になれるものではなかった。仏師は多くの下人を養って行くことができただけの給分（俸給）をもらっていた。つまり多くの弟子を抱えて毎日遊んで暮らせたのである。今の芸術家のように作品を売って生活するのはないのである。だから一つの仏像を作るのに何年もの歳月を費やし、完成した仏像でも気に入らなければ壊し、納得のゆくものを作る事ができたのである。もちろんその場合でも給分には関係なく、材料費も出来た仏像に対する報酬もでるわけである。このような状態にあればこそよいものができてくるのである。

近頃はやたらに「庶民芸術」とか何とかいう言葉が流行のようであるが、彫刻にしろ、絵画にしろ、すべて美術的な香りの高い芸術品は、このような環境の中から生れるものである。貧乏な庶民の力ではどんなにしてもできないことである。想像のはるかかなたにあるものである。



童話

長者と商人

北村 謙 順
水口 正 宏 画

昔、ある国に、仏様の教を大変よく守った
お金持ちが、ありました。お金持ちのことを
昔は、長者 といいました。たいへん立派な
心をもった長者でありましたので、自分の持
っている宝物やお金を、世のため人のために
惜しげもなくなげ出した人でした。そのうち
に、この長者の住む国に大飢饉が襲って國中
の人々が苦しみました。この様子を見た長者
は、自分の持っているありとあらゆる宝物を
出すことにきめて、この事を王様に申し上げま
した。王様は、どうしたらよいのだろうかと思
案に暮れていた時でしたので大変およろこ
びになって、長者の宝物を、お米にかえたり、
お金にかえたりして、國中の人々を助けるこ
とが出来ました。王様は それですから、い
つも 長者の事を忘れてはすまぬと思ってお

いでになりました。

けれども、宝物を出しつくしてしまった長
者は、一文無し になってしまいました。

これを見て、悪いことを考えたのが、商人
共でした。

ある日のこと、相談をしたのでしょう。そ
ろって、長者の家へやって来ました。

「長者 あなたは、もっている宝物を全部な
くして しまつて淋しいでしょうね」

「いやいや、少しも淋しいとは思いません。
國中の人々がよろこんでくれると思えば
ね」

「へえ、そうですかね。ところで、これから
どうなさる気です」

「私はこれから宝物を探しに行こうと思う。
私は少しもほしいとは思はぬが、宝物のあ

るのを知っているのは、私だけだし、私が
持っていれば、亦、何かお役に立つことも
あるからね」

「ああなるほど。それで、そのおー 宝の山
というのは、一体どこでしようか」

「それは残念ながら教えることは出来ぬ。と
にかく行って来るから みんなも楽しみに
しておいで」

と、長者は旅の仕度をすませると、さっさ
と出かけて行きました。悪い商人共は宝のあ
りかが知りたくて聞きに来たのですけれども
アテが外れましたので、亦ヒソヒソと話し合
うと、帰って行きました。

こちらは、長者です。毎日ひでり続きの暑
い道を、宝物をもって帰って来ました。

「ああ、のどがかわいたな、どこかに水はな

いかな」とあたりを見まわしますと、木の蔭に、井戸が見えます。

「ああありがたいことだ。水を飲ませてもらう」と宝物を入れた袋を木の下におくと、井戸の方に行つて見ました。深い井戸のようです。底の方に水が光つて見えます。桶を下しますとピチャンと音が聞えます。ドボンと桶が倒れてゴボゴボツと水が入ります。桶の綱をたぐり上げますとザーツと桶が上つて参ります。思はず体をのり出した長者は、待ちきれなかったように、桶のふちに口をもつて行くと、冷い水を　ゴクン　ゴクン　……

我を忘れて飲んでいるとき、その時です。急に体がもち上げられたかと思うと、アツと云う間に井戸の中へ真っさかさまに　ドボンとなげこまれてしまいました。

長者をひどい目にあわせたのは誰だったのでしょうか。そうです。あの悪い商人共です。この悪者共は、途中で待ち伏せをしていたのです。とうとう宝物は商人共のためにさらわれてしまい、長者は井戸の中へなげこまれてしまったのです。長者はどうなったのでしょうか。死んでしまったとすれば、このお話も

これで終りかもしれませんが、この長者は、井戸の途中に出ている木の根にしがみついていた。けれども出ることが出来ませんでした。



した。唯、上を仰ぐと、ポツカリと口をあけている井戸の上を白い雲が　流れて行くのが見えるだけで、一人として井戸をのぞく者も

ありませんでした。どの位たったのでしょうか。もう夕方かもしれません。赤く染った雲が流れて行きました。するとバタバタと足音がして、一人の女の子が水をくみに来ました。長者は思わず叫びました。
助けて呉れ……」

女の子は、驚いて　バタバタと、とんで行ってしまいました。やがて父親や母親を連れて来たのです。

「お前は何者じや　泥棒か」

「いや泥棒ではない　旅の者だ」

「どうして落ちたのじや」

「急におとされてしまったのだ」

「急に？　おかしいことを云うな　このままにしておこうかな」

「と、とんでもない。出れば何もかもわかる早く助けて呉れ」

「よし　それでは待っていなよ　綱を　と。」

「何がおかしいのだ　たのむ　早く出して呉れ」

「うん、可哀そうだな。助けてやろうか。だが待てよ」

「なんでもたのむ 出れば分るから」

「よし ではお助け申そう。それ娘よく綱をもっているよ」

おりて来た綱にしっかりとつかまった長者が、ようやく外に出た時はもうあたりが、うす暗くなっていました。

「一体お前は何者じや」

父親がのぞくように長者の顔を見た途端、

「こ、こ、これは長者様、長者様ではありませぬか、それならば何故早く長者だとおおせになりませんのじや。私は泥棒かもしれないと思ひましてね。とんでもないことを申上げました。私共は長者様の御恩を忘れることが出来ましようか。どうか先程の御無礼は平におゆるし下さい」

「私は、お前が長者だと知らないで助け上げて呉れた親切が身にしみてうれしい。おちいさんありがとうございます」

手を合せて父親を拝みますから、父親はびっくり

「ひゃー」と云って頭をかかえてそこに平れ伏してしまいました。

やがて町へ入った長者は、一番先に王様の

所へ参りました。

「王様行つて参りました」

「おおよくぞ 無事で帰られて何よりじや。

ところで宝物は沢山あったであらうな」

「ところが王様、大ちがいでございましてね。

何も見つからなかったのでございますよ」

「何？何も見つからなかったとな？聞くところによると、この町の商人共も宝探しに参

つて、今日帰つて来てな、これは大層宝が

当たつたようで、仲々威張りまわしておるよ

うじゃが、お前が見当らないで、あの商人

共が見つけたというのは亦不思議ぢやな」

「あの商人達は、どこかよい所を見当てたの

でございましょう。いやはや私の方はとん

と不漁でございました。ハハ……」

笑い乍ら帰つて行きましたが、王様はじつ

と考へこんだままでした。やがて立ち上つた

王様は、夜もふけたのでおやすみになろうと

すると、一人の女の子が家来に連れられて王

様のところへ参りました。この娘はあの井戸

の家の娘でした。王様は娘さんの話をうなず

きながら聞いておいでになりました。娘はや

がて帰つて行きました。

次の朝、王様は商人共をお城へおよびになりました。

「王様、何の御用でございましょう」

商人達は長者が帰つたのを知りませんのでスマした顔でたずねました。

「お前達にたずねるが、長者はまだ帰らんようだがお前達よく知っていると思うが、どうしたのだらう」

「はい、何でも人の噂でございしますが、長者

は、死んだそうな話でございします」

「一体どこで死んだのだらう。知つておらぬ

か」

「さあ 何でも井戸の中で死んでいたという

ことでございしますよ」

「これ 何を出鱈目を申すか、長者は死んで

おらぬぞ」

「そ、そ、そんなことは、ありません。間違

いなく死んだ筈でございします。

「よし 死んでおらぬと申すか。これ娘や出

て参れ」

「はい」昨夜来たあの娘さんが出て参りました。

「私共が、長者様を、お助けいたしました」

「それ見よ 長者は生きておるぞ」

「やい この娘、よくも ぬけぬけ嘘を申しおるな。王様 この娘の云うことは信用なさってはいけません。そんなことをいってうまいことを考へているのかもしれないよ」

「よし、未だ強情なことを申す者共じゃな。

よろしい。長者 長者」

王様は長者をお呼びになりました。向うの

悪は常に甘い

愚者は、悪の結果が現れるまでは、それを蜜の如く思い、その結果が現れてはじめて苦を感じる。

人に迷わくをかけたなり、人を困らせたり、楽をして何か得ようとするような悪いことはそれを行っている人にとって、面白いことかまたは自分だけの利益を求めているのか、怠けているからであります。約束を守ることや勉強することや家のお仕事を手伝うことは、みな骨の折れることなので、行わないのです。享楽を追うことも金銭や時間を浪費することも同じく面白いから行う

戸が開くと、長者が元気な顔でニコニコしながら入って来ました。

悪者共は、これを見た途端 見る見るうちに顔が青くなっていきました。そして体はワナワナと震え「へーへー」とくずれ伏したまま、顔を上げることが出来ませんでした。

「これ、悪商人共 思い知ったか これでも死んだと申すのか」

「へー へー」

のです。このような人を愚者といえます。

こんな行いをしていてよい結果が生れるわけがありません。ただ今の感覚におぼれ、何ら反省することのない生活をしていて、善い結果を求めることは無理というものです。今は骨が折れても、何ごとにも努力し、はげみ行えば、すぐ後にはよい結果が待っていることを知っていて行わない人も愚者といえます。

このような人は、悪い結果に出会って初めて苦しみ嘆きます。こんな筈でなかったと思っても間に合いません。よく後悔先にたたずといえます。転ばぬ先の杖というのと同じ意味です。賢者は今の苦勞や努力を楽しみとして実行します。今のこの一刻の違いが愚者と賢者とに区別します。

「これ 悪者共 それでもまだ宝物は自分の物だと云うのか どうじゃ」

「へー へー」

「これ 悪人共」

「へー へー」

「まだ何も申しておらぬは」

「へー へー」

「悪人共、お前達は一生涯牢の中に入っておれ、わかったか」

「お お おた おた おたすけを」

頭の上で手を合せて拝んでおります。すると長者が、「王様」

「何用じゃ。これでは罪が軽いと申すのか」

「そうではありません。どうかこの者達の罪をゆるしてやって下さいませんか。この通りおねがいたします」

と云って王様の前に跪いて手を合わせて

おるではありませんか。これを見た王様の目から見る見る中に大粒の涙が浮んだかと思うと ポタリ ポタリ とこぼれて悪人共の頭の上におちました。そして、王様も 悪人共も、いつの間にか手を合せて長者を拝んでおりました。(六度集経より)

苦難に満ちた 一茶の生涯と信仰

柴田行康

一 苦難の生涯

信濃国水内郡柏原村といえ、當時は北国街道八宿の一つで、加賀百万石の大名が参觀交替で往還する時の本陣のある所であつた。農業を主とする一寒村ではあつたが、とにかく江戸時代最大の藩祿をもつていた加賀侯の本陣があつただけあつて、南北に弓なりにのびた宿駅であり、民家も百戸ばかりの堂々たる宿場であつた。しかも属領は天領であつた。ここが一茶の故郷柏原で、彼の生家はこの街道筋にあつた。当時、大名行列といえ、豪勢なものであつた。

あと供は霞引きけり加賀の守

一茶の父は弥五兵衛、母はクニといった。母は庄屋宮沢氏の女であつたことを考えると父弥五兵衛の人望がしのばれる。一茶の生れ

たのは宝暦十三年（一七六三年）五月五日でまさに田植の真盛りであつたことは、農家として忙しい最中で、この時すでに一茶が茨の一生を背負つてきたように感ぜられる。名は信之、幼名を弥太郎といつた。

彼が三歳のとき、母クニが死んだ。彼の不幸は早くもこの時から始つた。彼の母をしたう気持は、それだけ大きかつた。

なき母や海見るたびに見るたびに

彼が八歳のとき、父は後妻サツを迎えた。

サツは子供の教育に不熱心であつたのか、それとも家の経済が追いつかなかつたのか、彼はまもなく塾をやめさせられ、家事の手伝いをしなければならなかつた。彼からみた新しい母はあくまでも継母であつた。

ままつ子や涼み仕事に藥たたく

やがて異母弟仙六が生れて、家の中は複雑になつてきた。よくあることだが、彼は祖母カナから可愛がられ、いつか母と弟との間に溝ができ、こんな幼少の頃から対立的な関係ができてしまつた。彼の味方であつた祖母カナは彼が十四歳のときに亡くなつた。彼は同じ年に職を江戸に求めて、故郷を去つたのである。しかし江戸に出てからの十年間についての、彼の経歴が殆んど解つていない。いろいろの職につき、また句作にはげんで諸所を放浪したらしい。彼が国中を歩いた旅は早くこの時分から始つてゐた。そして二十九歳になつて、初めて故郷を訪れた。

門の木もまずつつがなし夕涼み

それから十年、彼が三十九歳になつた享保元年に父弥五兵衛がこの世を去つた。父は信仰の篤い人で、息をひきとるまでお念仏をと、なえていた。また父は俳句をよくしたので、彼にとつては父の死はまことに大きな打撃であつた。彼は日記にこう認めた。

「抑、床つき給ふ日より朝夕の看経怠る時なくつとめ給ふに、今はおきふしもままならず、床にありながら、ともしび影ほのか

に称名の声となへたまふ声の常に替りて聞ゆるこそ、何となく心細けれ」

父の野辺の送りをすませてから、彼は再び放浪の旅を続けて行った。

春立つや四十三年人の飯

例の遺産分配の問題は、恐らく父の死後まもなく始つたことであろうが、この問題のためには彼に帰郷したのは、四十五歳のときであつた。しかし十四歳から三十年以上故郷にいつかなかつた彼は対して、村人が冷淡であつたのも人情として止むを得なかつたかも知れない。

雪の日やふるさと人のふあしらひ

遺産分配をめぐる紛争は、その後も続くが、とにかく一応の解決をみたのは、実に父の死後八年たった時であつた。彼の生活はもとより楽でなく嫌な問題に悩まされるのは更に辛かつた。

夕燕われにはあすのあてはなき

蝶とぶやこの世に望みない様に

やれ打つな蠅は手をする足をする

一応の解決をみたというものの、ほんとにこの解決案が実施されたのは更に後のことで

あつた。

ふるさとやよるもさはるも茨の花

ようやく遺産の分配がもらえ、彼には家と倉と、金子が三十兩与えられた。これは彼が五十一歳のときであつた。さすが問題解決は彼にとって嬉しいことであつた。

不思議く生れた家で今朝の春

煎餅のやうな蒲団も我家哉

そして彼五十二歳のとき妻を迎えた。新妻は常田キクといい、二十八歳の若さであつたから倍以上も年齢が違い、普通なら娘よりまだ若い妻であつた。この一二年が彼にとって僅かでも幸福の時であつたかも知れないが、これから更に旧に数倍する悲運が彼を待つていようとは、誰も知らぬことであつた。

めでたさも中位なりおらが春

彼の非運とは、やがて生れた長男混蔵は生後一ヶ月で夭折し、次男仙太郎も生れて間もなく亡くし、長女サトはやれやれこの分ならばと思われたのに、そのかいなく満一年一ヶ月で死んでしまった。

露の世は露の世ながらさりながら
続けざまに三人の子供に先立たれたが、三男

石太郎の生れたのは、彼が五十八歳のときであつた。同じ年に彼は中風で倒れた。しかし辛い病気は軽くすみ、やがて一応は恢復した。

ことしから丸儲けぞよ娑婆あそび

自分の中風が治り、ほっとしたのも束の間で三男石太郎もまた僅か生後三ヶ月であの世に逝つてしまった。

かげらふや月につきまとう笑い顔

まさに陽炎のように、この世に生を受けながら次々と死んでしまった子供の顔は、彼の眼の前から消したくも消えないものであつた。しかし彼を更にきびしく悲しませ、激怒させたのは四男金三郎の悲惨極まる死であつた。

四男金三郎の生れたのは、彼が六十一歳、妻が三十七歳の四月であつた。妻はこの出産で健康を害し、翌五月十二日に妻キクは遂にこの世を去つた。

小言いふ相手もあらばけふの月

出産で妻の健康を害したので、金三郎は赤洪村右衛門に里子に出さざるを得なかつた。妻を亡くして彼の涙の乾かぬ同じ年の十二月に、金三郎もまた死んだ。しかも金三郎は里親の許にあって飢死させられたのであつた。

彼の心は煮えかえった。

ちち恋しちち恋しとや義虫の

泣きあかしけん泣きくらしけん

還暦をすぎた彼にとって、この世に暮してゆくことだけで容易ならざる努力であつたろう。翌年彼が六十二歳のとき、後妻雪を迎えたが性格が合わず、僅か三月で別れてしまった。

もともとの一人前ぞ雑煮膳

さびしさに飯を食ふなり秋の風

そして彼が三人目の妻ヤヲを迎えたのは、翌年彼が六十三歳のときであつたが、同じ年に彼は剃髪している。

彼が六十五歳のとき、近所に大火があり、彼の家も類焼してしまった。彼は形ばかりの粗末な倉に引越したが、その年の八月中風が再発して重態となった。十一月十九日彼の容態は、俄かに悪化して、せまい倉の中で僅か数人にみとられながら、苦難に満ちた彼の生涯を終った。

鹽からたらいへ移るちんぶんかん

その時妻ヤヲはすでに一子を胎していたが翌文政十一年春女子を生んだ。ヤタと名づけ

たが、彼の子供としてはこの女子一人が成人し、一茶の血を伝えることになった。しかしそれも彼の没後の話で、生前には遂に子供の成育をみることもなしに終ってしまった。

二 一茶の信仰

一茶の家の信仰は浄土真宗で、父弥五兵衛は信心篤い人であつた。彼の信仰は三十九歳で父を亡くしてからはっきりしてきた。

只念仏申すより外にたのみはなかりき

秋風にあなた任せの小蝶哉

涼風はあなた任せぞ墓の松

ただ頼めく／＼とや桜吹く

涼風も仏任せの我身かな

浮世の人間どもは勝手きままに暮しているので、仏さまのご苦心について余り考えようともしない。

露ちるに弥陀の御苦勞あそばさる

晩年になって結婚したが、これによってやはり彼の苦勞も薄らぎ、のどかな幾日かを送ることができた。有難いことでもあつた。

木がらしの日なたほこして念仏かな

涼しさにみだ同体のあぐらかな

同じ家の中であつても、心の安らぎによつ

てこうも家が楽しくなるものかと思う。

涼風の浄土即ち我家哉

極樂の道が近よる寒さ哉

自力だ他力だといひ諍うことは今も昔も変りがない。他力だ他力だといっても、ほんとうに味得している人が割に少い。こうしたことを「おらが春」(文政二年)の中から拾うと、こんな一節がある。

「他力信心／＼と一向に他力に力を入れて頼みこそ候輩は、ついに他力繩にしばらく自力地獄の中へはたとおち入候。(中略)ただ自力他力何のかのいう芥もくたをちくらが沖へ流して、さて後生の一大事はその身を如来の御前に投出して、地獄なりとも極樂なりともあなた様の御はからい次第あそばされくださりませと御頼み申ばかりなり。(中略)」

ともかくもあなた任せの年の暮」

彼の俳句の中には、しばしば滑稽の中にも無常をいい、また無常の中に諦め、または安心が見られる。飄逸の中に孤独さを憐れんだりしている。これは幼少から逆境の中に暮し、晩年になって更に悟りに徹したためであ

ろうけれども、また俳友に多くの僧侶のいたこともその一因であった。

例えば銀閣寺を訪れた時に、寺の様子をみるよりは、同寺の鐘に一層の興味をひかれて

いる。
「それ鐘の功德広大なることは、経文にと
き給ひて、山鳥の尾の長々しきは今の世の
人の心にならず

聞くよりも心に思い身に修せば

いつか菩提に入相のかね

いかにせん昨日も過ぎぬ今日も暮れ

あす知らぬ身の入相のかね

最後に題六道をあげてみる。

地獄

世の中は地獄の上の花見哉

一茶

是がまあ地獄の種か花に鳥

鶴老

餓鬼

花散るや呑みたき水は遠霞

一茶

しらぬ火の春も忽暮にけり

鶴老

畜生

散花に仏とも法ともしらぬ哉

一茶

牛馬の暮て喰ふ春の野山かな

鶴老

修羅

散花に太刀長刀もかざり哉

鶴老

六一のあなかしましや花の陰 一茶

人間

人々よ花もあらしもうはの空 鶴老

さく花の中にうごめく衆生哉 一茶

天上

かすむ日やさそ天人の御退屈 一茶

永日と思ふ程なほ暮やすし 鶴老

鶴老は、下総守谷の住人で、一茶の生活援

助者の一人であり、一茶が下総方面に出掛け

ては泊ったりして親交あった俳友の一人であ

った。

月と仏さま

月が山や野原に没すると、人々は月があそこ
に沈んだという。また月が山や海からのほ
つてくると、人々はあそこから月が出たとい
う。しかし月はこの世に一つしかないものであ
って、あそこから出たり没したりするもので
ない。それと同じように仏さまも、現れたり

かくれたりするものでないが、人によっては
仏さまがあったりなかったりする。

月が満月となるまでは月が満つるといい、

満月がすぎると月が欠けるという。しかし月
は常に満ちているのであって、月が増すこと
もないし、減ることもない。仏さまもそのよ
うに、大きくなったり小さくなったりするこ
とがなく、常に完全なお姿でおられる。ただ
人々の心の大きさによって、それぞれ違った
仏さまのお姿が現われてくるのである。

月はまたすべての上に現れる。町にも村に
も、山にも川にも同じように現れる。また池
の中にも、瓶の中にも現れるし、葉末の露の
ように人々が気のつかない小さなものに至る

まで現れる。そして人がたとえ千軒行っても
万軒離れても、月はつねにその人に随うし、
どこも同じ月が現れる。月はいつも月である
けれど、その月を見る人の性質によって、見
る人の場所によって、人々は異った月を見る
し、月を見て感ずることが皆それぞれ違って
いる。仏さまもまたそのように、同じお力に
よって人々をお救い下さるにかかわらず、人
々によって仏さまが違って見える。仏さまは
人々によって、それぞれの因縁によって違う
ようであるが、ほんとは変りたまわぬ。

実話 厠のお話

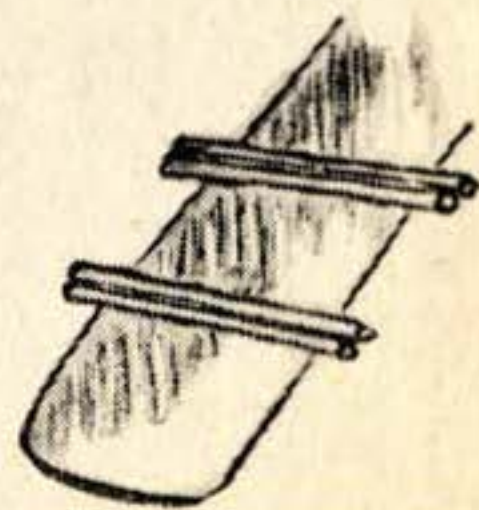
吉 野 翠 幹

現役で訓練を受けているとき、教官がいうには「三度のめしを満足に食べさせることができれば、一応は隊長としての及第点をやつてもよい」とのことであつた。

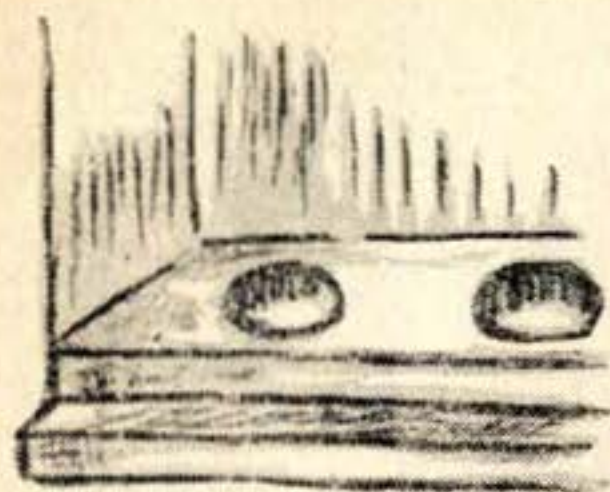
戦地での行動は、たいてい夜が明け始めると同時に行動が開始されるので、食事と排便という日課は、夜の明けぬ前に終えておく必要がある。この辺に「早めし、早くそ」の必要さが生れるゆえんで、ゆっくりしていたのでは戦争に間に合わない。師団司令部参謀には、作戦、情報の両主任とともに後方主任参謀がいて、弾薬、食糧その他の補給を専門に案をねっている。それ程でなくても、隊の責任者ともなれば、粉味噌をすすりながら、その日の任務から勘案して夕食のことを計画しなければならぬ。

食事は働くための原動力で、その重要性はいうまでもなく、現役当時から教官がいろいろの方式やら手段を訓練させるのは不思議であるまい。しかし排便の方となると、全く個人まかせで、自然の成行きにまかせきりであつた。しかし何分にも世帯が大きいし、いざとなると容易でない場合が多い。

中国ではどんな家庭でも実に立派な御虎子があつて、部屋の中でも一段とかがやく位な存在である。何れもせん細な絵まき模様がほどこされている。初めてこれをみて、一体何に使用するものか、さんさん迷つた挙句に、気の早い者がお櫃に代用したにしても無理のないことであつた。ただしこれが御虎子であつたと知って、何んともいえない、笑うに笑えない気持になつたものである。



これは一地に留つた場合であるが、いざ行動が開始されたとなれば、これまで自然のなりゆきで青天井の下の野糞ということになる。他人が用をたしているのを眺めているのはさして気にならないが、さて皆のいる所で自分が用をたすとなるとやはり恥しいものである。そこで独りこっそり出掛けてゆくのだが、ある程度まで離れてゆかなければ、一人になる目的が達せられない。そうなれば当然淋しい場所であり、物騒なわけである。そこで拳銃を片手にしっかりと握り、八方に耳をすませ、目でしっかりと見張りながら、けん命に用をたしたことも幾回となくあつた。皇軍の将校が、尻をまくつたままの姿勢で殺されていたとあつては、自分一人の恥辱ですまないことである。



またある時、コレラに見舞われたことがあ
る。コレラ菌が内地にいらなくなって久しいか
ら、知らぬ人もあろうけれど、コレラが発病
して半日たつと、サテこれが誰であったか見
当がつかぬ位に人相が変わってしまう。コレラ
には次から次にリンゲルを注射して、体力を
保たせ頑張らせるしか方法がなかった。丁度
その頃長雨があつて、道路に水があふれ、床
下浸水ということになった。コレラ流行の真
最中に便所という便所があふれ出し、数日水
がひかなかったのには、何うなることかと一
同青くなつてしまった。

戦争中の話はさておいて、私たちがナホト
カに上陸したのは昼過ぎであつた。何が何や
らわけが解らず、
ごてごてしている
内に日が暮れた。
夜になると、その
まま行軍をおこし
た。出発してから
は、途中の休憩が
あらばこそ、五軒
行軍位での猛スピ

ードで、星明りをたよりに足もとの見えぬと
ころを進んで行つた。坂を登ったり下つた
り、いくつの山を越え、川を渡つたことか、
歩きに歩いた。やつと平坦な広場に出て、行
軍がとまった。疲れきつてそのまま横にな
り、ウトウトする間もなく夜が明けた。

まわりが見え始めてから気がつく、何の
ことはない私たちは鉄条網で囲われた中に入
つていたのである。凡そ二米位の高さに張ら
れた鉄条網が長方形にめぐらされ、その大き
さは縦が百米位で、横はどの位の長さであつ
たか、遂に偶まで行つてみなかったが一軒位
はあつたらしい。何んとなくその辺を歩いて
みると、鉄条網にそつて、いくつもの穴が掘
つてあつた。穴といつても、一つの大きさが
縦五米、横十米位で、深さは四米は十分ある
と思われる大きなものであつた。このいくつ
も列んだ大穴が、実は便所であつたと後で知
つたことである。後から配給になつた丸太を
この穴に渡し、二本の丸太に二本の足をのせ
止木よろしく、そこで用をたすわけである。
初めは曲芸のようで、安定が悪かったが慣れ
ればこれで間に合つた。ただし雀ならぬ大男

たちが何列にも丸太にまたがり、悠々と用を
たしている風景は、まさしく一つの奇観とい
うべきものであつた。

この収容所は、曠野の一部に大きく鉄条網
を張りめぐらしただけで、何もなかった。施
設としては便所用の大穴がいくつも掘られ、
鉄道の機関庫等にある給水の太い鉄管が一つ
あるだけであつた。この青天井収容所に凡そ
一週間いたが、昼は強い太陽の直射に悩ま
され、夜は寒さにふるえて過した。雨が降らな
かったことは不幸中の幸であつた。

ここを発つてからは例の二十四日間にわた
る汽車の旅になるが、警戒の都合からか列車
はいつも人家のない野原に停るので、便所に
苦勞することはなかった。とくに夜があけて
から初めて停る場合は、まさに用便停車とい
うところであつた。同乗しているソ連兵が一
勢に車から飛び降りて、草むらに一列横隊に
並んで用をたした。用便中といえども、任務
である警戒を怠らないためか、一列横隊に列
び、全部揃つてこちらを向いているのも愛敬
があつた。こちらが笑えばあちらも笑うとい
うわけで、天真爛漫であつた。毎日こうした

行事を繰り返している内に、彼等は用をたしてから紙を使用しないことに気がついた。たれっぱなしで何等の処置をしないように見えただけ、実は草の葉で拭いているらしく、仲々の風流人とみてとった。

もともと当時のこの地方のソ連人にとって紙は貴重品であつたのではなからうか。一般に用便をすませてから紙を使用しないのが普通であつた。何故なら公衆用の便所には、紙が捨ててなく、その代り少量の綿がすててあるのが普通であつた。ところで私たちはブラウダを買って、これをトイレットペーパーに使用していたものである。

アングレンに着いてからの厠も、大きな穴が堀つてあつたことはナホトカの場合と同じであつたが、さすが長期使用の厠であるから小屋が建つていた。例によつてこの穴が大きくて深いので、いく年月使用したなら一杯になることか、私たちは穴をのぞき込んだまましばらく感慨にふけたものである。さて小屋には大小便の区別があつたが、大便所の方は細長い床にいくつかの円い穴があけてあり扉はなかった。つまり一つ穴に一つのお尻を

向けて用をたす。丸太の上だと一列縦隊であつたが、今度は一列横隊であり、談笑裡に同じ目的が達せられるので、この方が快適だつた。収容所の外にある公衆便所も同じ方式であつて扉があつたが、中の仕切りはなかつた。ある時、この公衆便所から出てきたら、外に一人の婦人が待つていた。さすが婦人は男と一緒に便所に入らぬ慣わしらしく、待たせて気の毒であつた。

話ほとんど内地帰還のために、再びナホトカにもどり待機することになった。海の向うは内地だと思ふだけで吹く風も、打ち寄せる小さな波にも、何んとかく内地につながったものが感じられ、いつまで海岸に立つていても決して見あきることがなかった。この待機中は使役か演説拝聴かの二つしか用がなかった。「同志諸君、いよいよ敵前上陸が目前に迫つた。頑張つて下さい」「同志諸君、未だに船をよこさぬことが、日本政府の誠意のないことの証拠である。この不実さを忘れないで下さい」「諸君を帰し、日本革命の戦列に加えて下さったスターリンに感謝電報を送ろうではないか」等々一ヶ月近いこの期間の話

は別のこととして、ここでの厠を申さなくてはならない。

とにかく昼間の演説から逃がれるには、使役を志願して外に働きに出るしか方法がなかった。私は雑用であつても、船の荷積であつても毎日使役を志願した。その中である日のこと便所の汲みとり作業を仰せつかった。

ここの便所の溜も同じく大きな穴で、縦二十五米、横五十米位あつた。この大きな穴がすでに一杯になつていて深さは解らぬが、まさに糞尿プールといふべきものであつた。この便所の裏に廻つた私たちに臭いのしみ込んだ古服をかしてくれた。私は猿股まで脱いで、この作業服を着た。次いで私たちに桶が三つ、天秤棒が三本、そしてシャベルが三本与えられた。これだけの道具でそばに止つてゐる自動車に、プールから糞尿を汲み込むのが仕事であつた。

さてこれをどうしたらよいか考えてみてもこれといった名案があるわけがなかった。そこで私はシャベルを握ると、思い切つてプールの中にとび込んだ。幸い上層部が固くなつていたので、膝までしかうまらなかった。こ



のように覚悟をきめて、頭から糞尿をあびながら作業をしていると、臭いがどうか、汚ならしいとか気を配ってもいらなかった。また柄杓でなしにシャベルをかけてくれたのも、固さからいつて用いよかった。ただし足で固さを測っていないと、ポッコリ身体が沈まないとも限らない。終日糞尿プールにつかっていて、自動車何台分を汲み上げたことか、こんなに一日を永く感じたことはなかった。

○

さて内地に帰ってから、私は奇妙な夢で悩まされた。余りにもつまらない夢なので、誰に話すわけもなく、またこの夢が何を意味し何が原因でみるものか、ついで考えたこともなかった。しかし最近に至るまで、同じ夢を何回みたか憶えてもいないが、その夢を

みると、身体をかたくして目を覚し、深い谷底に落ちたような不愉快さをどうすることもできなかった。

馬鹿々々しい夢であるが、その内容はこうである。夢の中で私は便所に行こうと思う。便所はいくつもあった。各部屋に必ずあった。渡り廊下にも、階段下にも、二階にも三階にもあった。私は数知れぬこれらの便所を次々に行くのであるが、いざ入ろうとすると、どの便所も全部糞尿があふれるばかりに充満していて、入るわけにゆかない。結局私は便所を求めて疲れきり、目が覚める。これは決して睡眠中に尿がつまってみる夢ではなかった。便所から便所にとさまよい疲れ、いつか私の身体全体が糞尿で汚され、いうにいわれぬ不快感に襲われて目が覚めた。

こんな面白くもない夢であり、第一穢なすぎて人にも話せないことであつた。そこでいかに嫌な思いをし、悪夢に悩まされても、自分独りだまってすませていた。ところが最近ある小説で、戦地の体験が今以て幻覚として現れ、苦しんでいるという話のあることを知った。そしてフト気がついたことだが、私の

嫌な夢も、糞尿プールの思い出が夢となって現れるのでなからうかと思った。

その小説の人物というのは、戦車隊に属し折から独軍相手に激戦中であつた。その戦車のエンチンが火をふき出したので、驚いて砲塔の蓋をあげようとしたところ、どうしても開かなかった。そのままならその人物はどうに戦死しているわけだが、どうにか燃える戦車から脱け出すことができた。そして終戦後になつて会社に勤めているわけだが、彼の耳に突如として砲声が聞え出し、そして失神してしまふことがあつた。短かければ数分ですむが長ければ半日近くこの状態が続いた。彼は戦車にとじこめられた死斗について、忘れたいわけではないが、特に気にしているわけでもなかった。それなのに雨の様に注がれる砲声とさく烈する音が聞えてきた。

この話を知って、やはり私が糞尿に追い廻される悪夢は、表面上は忘れたように思い出もしない糞尿プールの件が夢となつて記憶にあるものだと思つた。このように考えてから今日まで幸い穢い悪夢に襲われないですんでいる。

仏像を拝観して

藤沢慶子

入学以来待ち望んでいた、関西修学旅行もついに終つてしまつた。この期間中、時間に追われてあわただしく見学した日本の文化遺産は、随分数多かつた。従つて記憶のうすれたもの、また或る旧蹟と或る名所が混同したり、或る作品と或る場所が交錯して雑然とした印象が多い中に、静かに瞑想してみると、くつきり脳裏に浮ぶものは、中宮寺のあの美しい弥勒菩薩の姿であり、三月堂の本尊の両側に、つつましく立つておられた日光・月光両菩薩の静かな姿である。

くの人々に親しまれ愛されて来た仏像、その仏像の前にぬかずいた私であるが、この私の前にこの聖なるみ仏が出現されたようにさえ感じられ、我を忘れてみ仏の心に、偉大な感動の中に浸りきつたのであった。

その感動が未だ冷めきらないうちに、三月堂の日光・月光両菩薩を拝観した私は、すっかり感激してしまつていた。本尊の両側に静かに立たれた両脇侍、ひたすら合掌しておられる菩薩の姿、その合わされた掌から、お目から、いや全容姿の中には、騒然とした世を忘れさせる平和が、そして雑念の多い私達の心に安心と統一を与える無限の力が溢れていた。じつとそのお姿を見つめていると、何か

目がしらの熱くなるような感動さえ受けた。芸術も理解出来ない、宗教もわからない、ましては仏像の良さなど全然わからない自分を、あれ程迄に感動させたものは一体何だったのだろう。精魂こめて成し遂げられた先人の作品の中には、やはり先人の魂が、いや、み仏の魂が潜むのであろうか。

人は本能的に心の安住の地を求める。そんな、求めに応じてくれるのが仏教であり、仏

三月堂の日光・月光両菩薩を目の前にして自分は、「この位美しい姿で生きられたらなあ。」と思い、暫時ではあるが自分の心が静かに統一されて行つたあの時の感動は、一生忘れられないことであらう。

ふり返つて見れば、唯忙しかった見学であり、何一つ収穫らしい物も見当らない旅行であつたが、その私にとって、数多くの仏像を拝観し、その仏像の前で、ほんのわずかながらも私は私なりに心の和ぎを感じることが出来たという事が、最大の収穫であつたと思つてゐる。単なる私の自己満足であるかもしれないが……。清らかな、気高い仏像に接し、「自分もこんな風に生きたい。」と思つた気持ちを何時迄も忘れたくないものだと思う。

旅行前の学習に於ては、仏像には全く興味が無かつた私であるが、静かで小さな尼寺のせまいお厨子の中に、つや／＼とした、黒色に輝く清らかな姿を目にした瞬間、すっかり心が奪われてしまつた。時間のある限り、今にも私に話しかけそうなあの微笑みをたたえたやさしいお顔をじつと見つめていた。じつと見つめれば見つめる程、微笑みの温容が本当に美しくまた尊くもあつた。古い昔から多

会員だより

◇表紙には今後とも、あまり世に知られぬ仏像を続いて紹介して下さい。「遠くの方から」の新聞配達体験談について強い共感を憶えました。ご高説もよいですが、身近に教えられる所がよいのです。体験談は尊いものです。

(大津 浄光)

◇清新なる編集一段と光彩を増した感じで、教化第一線のこの曲角の思潮にあつて更にご活躍を念じています。一瀬氏の創作を久し振りに拝見しました。

(静岡 専修院)

◇仏教に入団式の無いのはどうした事でしょうか。またはそれに類

した行事があったら教えて下さい

新興宗教には入団の手続があつて

今日の私は私も同信の一人である

との自覚があつて結構だと思いま

の宗派のことを知りませんので今

に至るまで何んの不思議もなくお

念仏を唱えてきました。先日お寺

で聞きましたら、五重相伝という

のがあるが、近頃あまり行わない

とのことでした。キリスト教には

洗礼があつて、法名のような名前

をもらいますが、こうしたことす

ら仏教にありません。お寺や墓地

にお参りしている間に自然と私も

浄土宗になったわけですが、何ん

とも頼りないものを感じます。小

生の近所の方々と自分の宗旨を知

らない人がずい分あります。もし

入団式がなかったら、これと同じ

内容の行事を少なくとも年一回は

ほしいと思います。(岡山 石川)

◇近什雑詠 静岡 沢田岳潤

明暮は早や肌寒き老いらくの身に

しみにけり山に棲まへば

この頃は行時の曝書も物うくて老

いらくの身は悲しかりけり

寺宝の悉曇の写本虫はみて見るに

得堪えず悲しきかもよ

乏しくて新刊書も買はずけり背側

の題字も見えずなりけり

若き日に精根かたむけ読みにける

往生要集塵にまみれて

なき母の愛読せし絵入の往生要集

手にとりて見つ

読みつぎの指折と入れし古はがき

無き恩師の手跡なりけり

仏書みなみ堂の縁に並べつつ幾世

か前の住地偲べり

秋の空澄みける仲に一連の白雲な

かれ流れ行く見ゆ

これやこの富士の麓のこの庵に何

時としもなく三十年あまり

今は唯なにも思はずみ仏に命まか

せて心やすらぎ

◇「ゴネ得精神」おもしろく拝見

しました。これと同じ話はいたる

所にあります。ゴネ得万能が現在

の姿です。これでよいわけはあり

ませんが、いつ改まるでしょうか

私どもの前を通過して立流な県道が

できました。しかし例によって某

部落の数人が土地の売り渡しに応

じません。従つてその個所だけは

旧街道を迂廻して通ります。運転

手仲間ではこの地点が有名と見え

て、皆のん気にかまえています。

昼間なら、運転手同士が将棋をさ

して通れるのを待っています。何

しろ曲つた所をやつと自動車がす

れ替れる程度ですから、大型のト

ラックが出会ふと大変です。僅か

二軒の距離を五十分以上はかかり

ます。警察ではトラレラーの交通を

禁止していますがこれがまぎれ込

むと一層動きがとれません。トラ

ックに混つて自家用乗用車が同じ

く待っているのをみると現在の悲

喜劇をみるように思います。僅か

の距離ですから県なり市なり思い

切った買収費を出したらと思いま

すがこれがゴネ得に通ずるのでし

ょうか。とにかく大変な損害を皆

が蒙っています。(神奈川・植木)



聖典
講義

選択集私解 その五

ひねくれ者のために

竹 中 信 常

一、極樂の赤切符

選択集第四章段は「三輩（さんぱい）念仏往生の文」という章題である。三輩というのは、人間を上・中・下の三つの部類に分けたことを意味する。

仏教というものは、あらゆる人間を平等に扱うものだと思っていたのに、あにはからんや、上だの、中だの、下だのと区別をしている。私共の住んでいる娑婆世界でも、近頃は汽車の三等（赤ギップ）はなくなって、二等の青ギップまでなのに、どうして、無量寿経の中には、三輩が説かれていたのだらう。観無量寿経では、ごていねいに、それが更に三つづつに分けられて、三々が九品になっている。そして、おどろいたことに、お迎えに来て下さる仏さまも上輩の人、即ち家を捨て欲を棄てて坊さんになって修行す

る人のところへは、本物の如来様が御自分でおいでになり、また、一生懸命に修行すれば、この世においてでも、仏さまにお目にかかることが出来る。中輩の人、即ち坊さんにはならないが、善いことを行い、いましめを守って、お寺や仏像を作ったり、坊さんに供養をしたりする人のところへは、本物ではなしに「化仏」が来て下さる。ところが、下輩の者、坊さんにもならず、塔を立てたり、供養をしたりすることは出来ず、ただ自分だけで一生懸命お念仏をする人のところへは、仏さまは来て下さらないのである。ただ「夢に、彼の仏を見たてまつる」のである。貧乏人はえてしてひがみがちなものだから、こうハッキリお経文に書かれていたのでは、「地獄の沙汰も金次第」であるばかりでなく、「極樂の沙汰も金次第」といいたくもなる。これは一体どうしたことなのだらう。仏さまも世智がらく

なつて、口ではうまいことをいっても、実際には差別待遇をなさるようになったのであろうか。

わたしは宗学についてはシロウトであつて、このことははじめにお断りしておいたが、それだからこそ、こうした愚問も発せられるわけである。いまさら、仏さまにくつてかかろうというのではないが、何故、同じ人間を三つの部類にわけたり、九つに分けたりするのか、そして、ことさら迎えに代理をやつたり、夢で間に合わせたりするのか。どうも納得がゆかぬのである。

ところで、ここでふたたび「選択」ということを思い出す必要がある。再三述べたように、宗祖は数万巻もある大藏經の中から、浄土三部經をえらんだのである。どのようなにして、えらんだのであるか。いうまでもなく、宗祖の選択の規準は下劣な衆生の機根（信仰の能力）であつた。お經には上・中・下とあるが、宗祖の選択眼は当初から上下にあつた。下を掬えば、上は当然その中に入る。上から引き上げるのではなく、底の底から、持ち上げるといふやり方である。このことは、一期物語という本の中で、宗祖も述べられている。

「この宗（浄土宗）は悪人を手本となして善人を撰するなり。聖道門は善人を手本として悪人を撰するなり」

そしてまた、一紙小消息に述べられている。

「悪人なおうまる。いわんや善人をや」

という言葉をも、そのまま、すなおにうけとるべきである。こうして、宗祖はわれわれの間に入りこんで、みづから底の底までもぐり込んで、そこから、大きくすべてのものを掬いとりとしたのである。この「底の底までもぐる」ということのためには、すべての人間を同一にみていたのでは、どうしても、もぐり方が浅くなる。みんな上輩人としたのでは、もぐる必要もなくなってしまう。表面は同じ人間でも、信仰の世界からみるならば非常な相異がある。そして、中にはどうしようもない下劣下根のものがいる。観無量寿經にとかれる下品下生の者のように「不善の業たる五逆十惡を作りて、諸々の不善を具す」るものが多い。そうした下の下のものをここにハッキリと打ち出すところに、救いの深さがあるのである。宗祖が無量寿經や観無量寿經を選びとられたのは、むしろ人間というものが信仰の面、とくに、信仰能力である機根の面では非常なちがいを持っているということをも、ハッキリさせるためであつたことであつたのであろう。

わたしはわたしなりにこう解釈した。そして、仏さまは決して差別待遇をしているのではない。その反対に、たと

え差別があっても、すべて平等に極楽に救いにとってやろうという、仏さまの平等観（平等のための差別）をわたくし達にはっきり感じさせるために、三輩、或は九品というような区別を、ことさらなさっているのである。そうした裏の意味までを明確に汲みとられて、このお経を選びとられた宗祖の偉大さは、いまさらいうまでもないことである。

二、ゾウリとワラヂ

皆さんのように、ものわかりの良い方々ばかりだと、もうこれで問題はないのだが、世の中には随分とわけのわからぬものや、ひねくれてものを考える人が多い。だから、このことを勘定に入れて、宗祖はこの章（第四章段）をお書きになっているのである。

では、何を勘定においれになったのか。それは、世のひねくれものが、お経の文句をたてにして

「念仏のほかには色々修行の方法が説かれてあるのに、どうして念仏だけを唱えよというのか」

とネチ込むことである。このことは、裏がえしにいうと、「念仏以外の諸行を雑行ときめてかかることは、諸行を説いた仏さまの意に反することになるではないか」ということになる。梅尾（とがのを）の明恵という人が、その急先

鋒であつた。このことは前々号（九月号）にも触れたとおりである。宗祖は、何故諸行が雑行であり、捨てねばならないかという理由を五つ挙げておられるのである。そしてここでは、どうして無量寿経の三輩文に諸行が書かれてあるのか。どうせ捨てられるべきものなら、わざわざ書かなくてもよいであろうに、という疑問について、三つの答えを出されているのである。むづかしい言葉でいうと廃立（はいりゆう）助正（じよしゅう）傍正（ぼうしゅう）という三つである。

廃立というのは、原文に「諸行を廃して、念仏に帰せしめんがために、しかも諸行をとく」とあるように、廃棄するため「諸行」を説く。「捨てるために拾う」というのである。捨てる（廃する）ためには手に持っていないければ捨てられない。持っていないものを捨てることは出来ない。廃するものもそうで、廃するものがなければ、廃することは出来ない。諸行が説かれてある。だから、これを廃することが出来るので、説かれてなければ、廃することは出来ない。話がややこしくなったが、理窟はそうである。では、どうして「廃する」のか。それは「ただ念仏をもちゆる」がためである。ここで再び、前節の筆法をかりるならば、始めから「念仏」だけしか説かれてなかったのなら、何も

宗祖をまたづしても、誰でも念仏をとることは当り前である。ところが、それでは念仏の印象が弱い。諸行と念仏とがあつて、その中から、特に念仏だけを選びとる。そこに「念仏」のすぐれた価値が浮き出て来るのである。選択とということの意味は、念仏をえらびとるということであると同時に、その裏に、他の一切を捨てるとということが強く打ち出されねばならない。この場合、諸行が廃せられるのはむしろ当然といわなければなるまい。

助正というのは「念仏を助成せんがために、しかも諸行をとく」と書かれてあるように、念仏をとなえる助けとなるために、諸行がとかれるというのである。これもまた前々号に書いたことであるが、五つの正しい行の中、称名念仏以外の四つは「助業」といわれ、それは念仏生活をいとなむ「機縁」となるだけのものである。しかし、この「助」に二つの意味がある。補助と助発（じよほつ）とである。補助というのは、盲人が杖をたよりに歩くように、どうしても助けがなければなり立たぬことで、元祖以前の祖師達が主張した念仏は、みんな何かほかの行をつけ加えていたのである。助発というのは、遠い道を歩くのには、ソウリよりはワラジの方がよいとか、火を燃すには、通風をよくするとよく燃えるといったように、なくても済むが、あつ

た方が便利であり、しやすい場合をいうので、宗祖が唱えられたのは、まさしく、この場合の念仏なのである。念仏だけでも立派に往生出来るのであるが、少しでも念仏行に人の心をふりむけさせ、行いやすいように助けをさすために諸行を説くのである。そして、さらに、同じく助けになるにしても、同じような方法を用いるのと、全然ちがった方法を用いるのと二通りがあるが、余りこまかくなるので省略する。

傍正というのは、念仏が正しい教えであることをハッキリとさせるために、その傍らに諸行を並べて説いたのである。何ごとによらず、ものの価値というものは、他のものとくらべてみるとよく分るものである。砂糖の甘さは砂糖ばかりなめているのより、少し塩気のまじったほうが甘く感じられるものである。そして、念仏にも、諸行にもこれをつとめる人の側に三通り（三輩）の区別があつて、いろいろに比較される。そして諸行は色々にちがっているが念仏だけは、すべてに通じて一本であることが鮮明にされる。そのために諸行をとくのである。いわば念仏の甘さをあちわうために諸行という塩気がとかれているのである。

三、ズバリ「廃立」

経文に諸行が説かれているわけは、以上の三つによることは分ったが、それならこの三つのわけの中で、どれが一番大切かというと、宗祖は善導大師の意を掬まれて、第一の廃立をとられたのである。

ここで、わたくし達は少しく、宗祖の人間性についてみなければならぬ。

今春ひらかれた知恩院展を見た人は、知恩院所蔵の藤原隆信筆の「法然上人」画像を見たことと思う。そこに描かれている宗祖の相貌は柔和円満この上もないものである。しかし、ヂッとその面貌をみつめていると、その眼光は意外に鋭く、深い光をたたえていることに気がつくであろう。宗祖はこのように外見の柔和のうちに、徹してやまぬ鋭く、そしてたゆみのない烈しさをひそめておられるのである。外柔内剛（他人にやさしく、自分にきびしい）という性格がアリアリとうかがわれるのである。

この、うちにひそんでいる烈しい気質、これが、時に、その姿をあらわすことがあって、たとえば慈眼房叡空との論争に、あるいは流罪に当たっての決意（われたとえ死刑に行わるとも、この事（念仏）いわずばあるべからず・浄土随聞記）にそれがみられる。そしてそれは選択集の眼目である「選択」ということのうえに、一貫してあらわれてい

るのである。即ち、捨てるべきもの、廃すべきものはドシドシ、思い切ってすててしまふ。それまでの祖師達が、思い切れずに、いささかモタモタしていたのにくらべると、宗祖のやり方は「果斷」の一言につきる。いささかのタメライもなしに、一刀両断である。今の言葉でいえば、「ズバリそのもの」である。こうした勇氣と決断が、あの柔和な宗祖の胸の中に燃えさかっていたということは、深く思い至らねばならぬことである。

一応は三つの理由をならべて諸行の説かれているゆえんを説明されているのだが、あにはからんや、宗祖自身の決意はトウにきまっていた、ズバリ「廃立」。いらぬものは捨てちまえ。しかし、ないものは捨てられぬ。だからまづ捨てたのであるというのである。そして、諸行も、三輩も、九品も、すべて念仏一本にしばらくされたのである。手拭いをゆすぐには水につけねばならぬ。しばらくは水がたれる、あとには固くしばらくされた手拭（念仏）が手にのこるのである。

「すでに一向（いっこう）という。余を兼ねざることあきらけし。すでに先に余行を説くといえども、のちに一向専念という。あきらかに知りんぬ。諸行を廃してただ念仏を用いるが故に一向という。もししからずんば一向のことは最ももって消しがたきか。」（選択集第四章段）（文学博士）

◆ 信仰のめばえをつちかう ◆

— みほとけのおしえ —

よいこのいつしゅうかん

ひめくり式七曜表

B5版 九葉

三〇円 一〇円

表紙画 / のざわ ともかつ
本文画 / おぎはら ひろし

日・てを あわせて

月・きょうも ニコニコ げんきよく

火・きそくを まもる

水・せいけつ せいとん

木・わになつて みんななかよし

金・よい ことば

土・よろこびと はんせい

・ねんじゅう ぎょうじ表

運動会の賞品に／稚児参加の記念に／年末
施本に百部以上より貴名 行事記念の印刷
その他の御奉仕うけたまわります。

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 大 道 社

電話 八三三二五九四四

振替 東京 八二四七

あとがき

◇三枝樹正道先生から玉稿を頂きました。ご承知の通り大島大僧正のあとをうけて、京都家政学園長になられ、多年女子教育に当たられています。先般同学園は女子短大を併置され、ますますご隆盛を極めています。

◇北村謙順先生は、児童教化の第一線で活躍されています。こん後も本誌上を飾って頂くことになっています。

◇小川隆英君は正大三年生ですが暑中休暇を利用して、正大から自坊の花巻まで行脚されました。同じ夏休み利用にも、こうした行脚は珍しいことで、途中道ゆく人がいろいろ言葉をかけたさうです。

◇林靈法先生は東海高校長として活躍されていますが、生徒に仏教的な行を併せ訓育していることで有名です。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一カ年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄 土 十一月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年 十月廿五日 印刷

昭和三十六年十一月一日 発行

定価 五十円

編集人 村 瀬 秀 雄

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 関 二 三 男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 法然上人顕仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和三十六年十月二十五日印刷 昭和三十六年十一月一日発行

浄土

第二十七卷

第十号

定価金五拾円 (送料六円)

日本一の生産・設備

梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田